

第七回 民話 ゆうわ座 — 話に遊び 話を結び 座に集う —  
民話のなかのこどもたち ～ その「誕生」をめぐる ～

目次

1. 「民話 ゆうわ座」について	進行 小田嶋 利江	p.3
(記録 島津 信子)		
2. 「こどもの誕生」の民話の語りを聞く	語り手紹介 小野 和子	p.5
『田螺の息子』[片倉舜さん(東松島市矢本 大正十三年生)]	語り 長須賀 直子・島津信子	
『一寸坊主』[木村一郎さん(登米市米山町 )]	語り 寺嶋 大輔	
(記録 島津 信子)		
3. 採訪者がとらえた民話のなかの「子どもの誕生」 その一	話題提供 小野 和子	p.13
『おんぶおばけ』[文 松谷みよ子・絵 ひらやまえいぞう(童心社 1992)]		
(記録 加藤 恵子)		
4. みなさんと感想や意見の交換 その一		p.22
(記録 加藤 恵子)		
5. 「子どもの誕生」の民話の映像を観る	語り手紹介 山田 裕子	p.26
『瓜こ姫こ』	語り 佐々木 健 [岩手県遠野市宮守 昭和十二年生]	
(記録 山田 裕子)		
6. 採訪者がとらえた民話のなかの「こどもの誕生」 その二	話題提供 山田 裕子	P.31
(記録 山田 裕子)		
7. みなさんと感想や意見の交換 その二		p.34
(記録 山田 裕子)		

第七回 民話 ゆうわ座 各担当者

〈当日〉	司会進行	小田嶋 利江
	話題提供	小野 和子・山田 裕子
	語り	長須賀 直子・島津 信子・寺嶋 大輔
	板書	瀬尾 夏美
	撮影・録音	酒井 耕・長崎 由輝・福原 悠介
	SMT スタッフ	渡邊 耀平・田中 望
〈記録〉	文字起し	小田嶋 利江(調整・成形)・加藤 恵子・島津 信子・山田 裕子

第7回 民話ゆうわ座 一話に遊び 輪を結び 座に集うー  
民話のなかの子どもたち ～ その「誕生」をめぐる ～

0. はじめに

【小野和子さんの著書の紹介】

清水 チナツ (PUMPQUAKES)

みなさま、今日は遠くからお越しいただいて、ありがとうございます。ゆうわ座がまもなく始まるんですけど、ちょっとその前にすこし、お知らせをさせていただきます。奥の方で、入口の方で、本日、『あいたくてききたくて 旅にでる』、みやぎ民話の会の小野和子さんによる単著の販売をしております。これは昨日、完成して届いたばかりの、出来立てほやほやで、小野和子さんのこれまで五十年間の採訪の旅の旅日記を軸に、編まれています。三六八ページとかなりボリュームがあって、年を越しながら読むのにぴったりな一冊だと思ってます。あとは、若手の三者のアーティストたちの寄稿とか、志賀理江子さんによる写真とか、大西正一さんによるデザインも魅力の一つですので、ぜひ見本もございますので、お手にとってご覧いただいて、ご関心を寄せていただければと思います。会場で今日一日、この会の終了まで販売しておりますのでどうぞよろしくお願いいたします。ありがとうございます。

【考えるテーブルについて ほか】

渡邊 曜平 (せんだいメディアテーク)

では、一時を回りましたので、これから「民話ゆうわ座」をスタートしたいと思います。本日は〈考えるテーブル〉「第七回 民話 ゆうわ座 民話のなかの子どもたち～その誕生をめぐる～」にお越しいただきましてありがとうございます。私、仙台メディアテークの渡邊と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

はじまる前に、この緑色の家具についてご説明いたします。この〈考えるテーブル〉という企画ですが、これは震災後につくられたもので、ここを会場として、震災復興、地域社会、あるいは表現活動について考えていく場所なんですけれども、これまでさまざまな団体の方がこの場所を使ってイベントを開催してきました。この「民話 ゆうわ座」もその一環として始まったもので、みやぎ民話の会「民話 声の図書室」プロジェクトチームのみなさんが、ホストとなって開催するイベントとなっています。「民話 声の図書室」なんですけれども、このゆうわ座の他に、伝承の語り手さんの映像記録を撮ったり、音声記録をデジタル化する活動も行っておりまして、これまでにDVDやCDを作っているんですけども、これらの資料は、この上、メディアテーク二階の映像音響ライブラリーでご覧いただくことができますので、ぜひご利用ください。

そして、ゆうわ座を始める前にちょっとお願いがあります。まず、この会はメディアテークの事業記録として、映像、音声、写真記録を行っております。二階の映像音響ライブラリーですとか、ウェブサイトですとか、そういうところで記録を公開していきたいと思っております。そしてまた、メディアテーク全体のドキュメンタリー映画を撮影しております。その一部として今日の映像も使わせていただきたいと思っております。そしてさらに、今日は『河北新報』さんの取材も入っております。このイベントの記録、そしてメディアテークの記録映画、そして、『河北新報』さん、今日は三ついろんな記録があるんですけど、それについて「ちょっと映りたくないな」という方は、スタッフがおりますのでお声がけいただければと思います。

また、この会は途中入退場可能となっております。三時間の長丁場ですので、途中体を伸ばしたり、お手洗いですとか、随時ご自由にさせていただいて結構です。

それでは、ちょっと前置きが長くなったんですけども、それでここから、みやぎ民話の会「民話 声の図書室」プロジェクトチームの小田嶋さんにマイクをお渡しして、始めていきたいと思っております。それでは小田嶋さん、よろしくお願いいたします。

記録 島津 信子(みやぎ民話の会、「民話 声の図書室」プロジェクトチーム)

## 1. 『民話ゆうわ座』について

司会進行 小田嶋 利江 (みやぎ民話の会「民話 声の図書室」プロジェクトチーム)

### 【みやぎ民話の会と〈民話 ゆうわ座〉】

みなさん、こんにちは。最初っからこんなにたくさんの方に来ていただき、ほんとうにありがとうございました。「民話 ゆうわ座」も第七回目です。私たちは、メディアテークのみなさんと、みやぎ民話の会の中の「民話 声の図書室」プロジェクトチームと協働で、このゆうわ座をやっているんですが、もう一つ大事なものは、参加されるみなさんも三番目のこのゆうわ座を作っていくみなさんですので、今日はほんとうによろしくをお願いします。

「民話 ゆうわ座」の〈民話〉ですけれども、ひとことで言うと、今までずうっと人々が口から耳へ、耳から口へと口伝えに伝えてきたお話すべてなんですね。みやぎ民話の会は、そうした村とか里とか、海とか山とかに伝わっている口伝えのお話をみんなで訪ねて、そこで伝えている方から聞き取って、それを記録する活動をしてきました。ですから、今まで文字にしたり、そのとき録音して音にしたり、その語り手の皆さんが語っている姿を映像にしたりして記録してきました。

その記録をこれから皆さんにも観てもらったり聞いてもらったりします。その上で、それを一つの入り口として。そして我々はそうした口伝えのお話をいろいろなところで聞いた時に、それを「採訪」といいますが、採訪したときに語ってくださった語り手のみなさんとのやりとりの中で、いろいろ考えたこと、感じたこと、疑問に思ったこと、それから、「これ、なんだろう」と言ってずうっと引っ掛かっていること、そういうことを一つの手がかりとして、皆さんと一緒にそれらの記録とわれわれの採訪の体験とを重ね合わせて、いろいろ口伝えのお話の民話のなかのいろいろなことを考えてみて、いま参加されているみなさんにも、みなさんのもっているいろいろな知識や体験や、そうしたさまざまな、それぞれの人が持っているものと照らし合わせていただいて、いろんな言葉だとか、まなざしだとか、それからいろんな問いかけなんかを私たちも与えてもらいたいし、皆さんもそこでつかんで、なにか持って帰っていただけたらいいなあと。そうしたみんな考えて語り合う場、それが「ゆうわ座」です。

### 【民話のなかのこどもたち その誕生をめぐる】

で、今回のテーマはですね、第七回ですが、「民話のなかのこどもたち～その「誕生」をめぐる～」となっています。これは、第六回の「民話のなかのじじとばば」というテーマで去年やりましたが、それとつながって、その延長線上で出てきたテーマです。第六回の中には、日本のそうした民話というのは、なんで、その物語の初めにお爺さん、お婆さんを置いて、爺さん婆さん二人だけのくらしから物語を始めるのか、その二人の爺さん婆さんを物語の中心に据えてきたのか、そういうことを考えました。で、今回はそうしたお爺さんお婆さんが出てくるお話はいっぱいありますけれども、その中の多くの爺と婆は、爺と婆二人だけでたくましく生きていくんですけれども、中には爺と婆二人だけではとっても寂しいから、子どもが欲しいといって、子どもを願って授けられる話もあるんですね。で、そういう子どもが授かる爺と婆の話、それを中心にして、子どもたちについて考えていきたいと思えます。特に、そういう子どもたちがどんな風にして、どんな形でこの世界に現れてくるのか、その「誕生」をめぐるってということなんですね。

### 【爺婆にこどもが授かる民話】

では早速、子どもが授かる日本の民話、なにかあるか、みなさん、まず挙げていただけませんか。手を挙げなくても、声だけでも構わないですが、どうでしょう。たとえば…あ、『桃太郎』。はいそうですね。いく

つか挙げていただきましょう。書いていただきますのでね。はい、『すねこたんぺこ』。そうですね。あ、『一寸法師』。『すねこたんぺこ』も『一寸法師』も…あ、『かぐや姫』。みんな不思議な形でうまれてくるんですね。生まれてきた姿も小さかったり、竹からでてきたり、ちょっと普通と違う感じですね。『すねこたんぺこ』っていうお話の名前です。あと、ありますか。『瓜子姫』そうですね、瓜から生まれてきた女の子の話です。もう少しいきましょうかねえ。はい、『田螺<sup>たにし</sup>息子』、『ツブ息子』、そうですね、生まれてきたのが田螺だったんですね。これも面白い話ですね。『花咲じいさん』これは、子どもと言うより犬ですね。

小野—これはちょっと違う。

子どもじゃなくて犬が授かるんで、ちょっとこれはおいておきましょうか。あとは力持ちの『力太郎』それから、『こんぴ太郎』垢から生まれた子、お爺さんお婆さんの垢を丸めて作ったお人形から子どもができたという。あと、人間ではないものとして、たとえばへびの息子、『へび息子』、カエルの息子、『カエル息子』、そんないろんな話がありますね。

### 【『田螺息子』と『一寸坊主』】

で、これから、そういうお話の子どもたちについて、子どもたちがどんな風にこの世に現れてくるのかを考えるんですが、この中でちょっと違うものとして、『桃太郎』と『瓜子姫』があります。これはですね、子どもを授かるんですが、お爺さんお婆さんが子どもが欲しいと言って神様にお願いして授かったものではなくて、欲しいとは思ってなかったんだけど、偶然流れてきた桃とか瓜から生まれて授かったこどもです。これはまた、ちょっと後半に扱いますので、最初はそのほかのお話について考えていきたいと思います。

とくに、この代表例として挙げたいのが、『田螺の息子』、『ツブ息子』、それと、ちょっと出てこなかったかな、『一寸法師』という、あ、出てましたね。それをまず二つの代表例として、お話を聞いてもらいながら考えていきたいと思います。

記録 島津 信子(みやぎ民話の会、「民話 声の図書室」プロジェクトチーム)

## 2. 「こどもの誕生」の民話の語りを聞く

語り手紹介 小野 和子 (みやぎ民話の会「民話 声の図書室」プロジェクトチーム)

小田嶋—それでは、具体的にみなさんに『ツブ息子』と『一寸法師』、ここでは『一寸坊主』という名前で語られているんですが、それを聞いていただきます。これは、みやぎ民話の会の会員として語りを学んでいる方に語っていただきます。『ツブ息子』が島津信子さんと長須賀直子さん、『一寸坊主』が寺嶋大輔さんです。なお、その元のお話の語り手については小野和子先生から〈語り手の紹介〉をいただきます。よろしくをお願いします。

### 【宮城県民話伝承調査】

それでは、ほんとうは映像で映して、語ってくださる方のお姿と言葉を皆さんにお見せしたいんですけども。この『<sup>たにし</sup>田螺の息子』と、『一寸法師』じゃなくて語った方は「『一寸坊主』だぞ」と念を押されたので、『一寸坊主』の二つは、映像で撮ることができなくて、ただ一回だけお目にかかって聞いてきたという話なんです。

どうしてただ一回だけなのかと申しますと、両方とも今から三十年あまり前に私がお目にかかって聞いてきた話なんですけれども。ちょうどその頃ですね、私どもは、宮城県教育委員会の文化財保護課というところの委託を受けて、「民話伝承調査」ということを、三ヵ年計画でやらせてもらっています。三十年前っていいますと、民話に対する認識も非常に薄くて、ま、「女子どもの寝物語さ」と。そういうことを調査するというのも、非常におぼつかない形ではあったんですけども、なぜかそのころ、日本の各地でそのような調査が行われたんですよ。

それでね、そんな大事な調査を、私ども「みやぎ民話の会」なんて大きな顔して名乗ってますけど、みんな素人集団でして、ちゃんと民話の勉強した者なんて一人もいないんです。そんなところにこんな大事な話が舞い込んできたものですからびっくりしましたのね。でも、私はどうしてもやってみようと思ったのね。少し無茶だったかもしれないんですけど、引き受けまして、三ヵ年の間に県内七十四市町村をくまなく歩いて、どの町村でどんな民話の伝承状況があるかという雲を掴むような調査に着手いたしました。

それは全国的に行われていたので、他県のをちょっと見てみますと、やっぱり大学の先生とか民俗学を修められた方とか、郷土史家とかそういう方たちが中心にこの調査をされていて、そうしてまとめられたものを読みますと、すでに活字になっているものとか、村誌や町誌から並べ替えたっていうものが多くてですね、ああ、こうやってまとめるんだと後から知んですけども、私はそういう発想が全くありませんでした。

とにかく、実際に当たって、七十四市町村くまなく歩いて、聞けるだけのものを聞いて、歩けるだけのものを歩こうってことで、この三ヵ年を過ごしたんです。そして、メンバーも二十人足らずでしたし、さっきも言いましたように民話が好きだっていうことでは一致してたんですけども、専門的に民話を修めた者はだれもおりませんでした。そして、勤めをもっている人間も多かったものですから、フルにこれに従事できるっていうのは、本当にほとんどいないというようなありさまの中でしたけれども、この三ヵ年のうちに私どもは、388 人の方から 2,700 話あまりの民話を聞いて記録いたしました。それを全部テープから起こしまして、資料集を作り、さらにその十分の一を県へ報告書として提出すべく整理した日のことが思い出されます。

そんな日々の中で、今から語っていただく『ツブの息子』『田螺の息子』の話、それから『一寸坊主』の話も聞きましたのね。それで、再会を約束して、そのときお目にかかった 388 人の方に、みんなに「もう一回来ます」「もう一回来ます」って、再会を約束したんですけども、やっぱり手が回らずに再会が果たせない

うちに多くの方が亡くなってしまわれました。そして、いま語っていただくお二方も、もう二度と、そのときを逃しましてお目にかからずにきましたんです。でも、三十数年前に、見ず知らずの私どもの願いに応じて話を語ってくださった二人の語り手の顔を忘れることはできませんし、その語りを今日、ここで披露させていただいて、みなさんと一緒にその話について考える時間を得られたことをありがたく思っております。

### 【矢本町の片倉舜さん】

最初に語っていただく『田螺の息子』を教えてくださいましたのは、矢本町矢本（現東松島市矢本）にお住まいの片倉舜さんというお爺さんで、この方は大正十三年生まれの方でした。お目にかかったときは六十六、七歳でいらしたような気がいたしますが、非常に丁寧な、丹念な語りをされる方でしたので、ずいぶん午後ずっとお聞きしていたのですけれども、三話くらいしか聞けなかったんですね。ツブの息子と、港が近いものですから鯨の話とか、それからなんだっでしょうかと、書いてきたのに忘れてしまいましたけれども、三つくらいしか聞けない。丁寧な丁寧な話で、一話一話がすごく長いんです。それで、今日もお二人の方で一話を語っていただくという格好にしたんですけれども。

片倉舜さんは、

「どういうときに聞いたんですか」

って聞いたら、

「おれは、ばんつあんに風呂で聞いた」

って言われるんですね。風呂に入るときにお婆さんが肩をずっと押さえて、

「よく温まるように、いま、ばんつあん、話聞かせっからな」

って聞かせて貰った。

昔の風呂ですよ。今の風呂と違いますね。真っ暗で、ろうそくで灯り取るような、そして風呂桶に水が入ってるような、そしてドブネズミがあちこち走るような、そんな風呂の小屋で入るものですから、嫌で嫌で、早く出たくて暴れると、ばんつあんがぐうっと肩を押さえて、

「ばんつあん、むかし語っから、おとなしくすてろな」

って言われて、風呂に入りながら聞いたって言われるんです。とってもいい風景でしょう。お風呂なんかでも語ったんですね。そして、その話を覚えていて私どもに語っていただきました。

### 【米山町の木村一郎さん】

それから、もうお一方、『一寸坊主』を語ってくださったのは、木村一郎さんっていう方で、登米郡、今の登米市の米山町中津山にお住まいの方でした。そちらの方に歩いて行って、朝からずっと歩いて、なかなか話を語ってくださる方にお目にかかれずにおりました日の午後、木村一郎さんって言われます、明治四十二年生まれの語り手のお爺さんに会いまして、そして、話を語っていただきました。

とってもこの方は素晴らしい語り手で、再度訪れなかったことを今も後悔していますけど、たとえば『カニむかし』『舌切り雀』『屁つたれ娘』『キツネの恩返し』『三枚のお札』『へびの婿』なんて、名前聞いただけで聞きたくなるでしょう。そういう話を次々にしてくださったんですね。

そして、その日、私は一人の連れがありました。それは男の大学生だったんですよ。卒業論文で民話を書きたいんで、一緒についてきたいっていうんで二人で歩きましたの。そして、この木村一郎さんというこの方から、今言いましたような話をずうっと、日が暮れるまでお聞きしたんですけれども。彼はね、話がはじまった途端に、ガターンガタンといびきかいて眠り始めたんですよ。つまり、朝からぐるぐる歩いて、よう

やく夕方に上げていただいた家で、お茶をご馳走になりながら昔話聞いたんで、疲れてたんだと思うんですね。それで、こうやって舟をこぎ出したもんで、私は気が気じゃなくて、つねったり叩いたりしたんですけどね、さっぱり目え覚まさないどころか、ぐうぐういびきかき出したのね。

そしたら、一郎さんがね、

「いいから、ほっとけ」

って言われるんですよ。

「今、あんたに言われて、何十年ぶりでこの話、語ってっけどもな、おれもな、ばんつあん、じんつあんに抱かれて、囲炉裏のそば、寝床の中で語ってもらいながら、ぐうぐう寝てしまったもんだ。おれ、今あんたに言われて何十年も前に覚えてた話をこうして語って、この人がここでグウグウ寝たのは嬉しい」

って言われるんですね。で、

「おそらく、ばんつあんも喜んでくれるに違いないから、そのままにしておけ」

って言われたので、彼は結局一話も聞かないで、ぐうぐうぐうぐう寝て、そして帰ったということになったんですけどね。学校の先生になるって言ってましたから、今ごろはどっかの学校の先生になってるんじゃないかと思えますけれどもね。そんな風にして、一郎さんのお話を聞いてきました。

そしてね、一郎さんは、今語っていただきますが、『一寸坊主』の話も「〈法師〉じゃねえぞ、〈坊主〉だぞ」って言われるんです。『一寸法師』じゃない、『一寸坊主』って念を押されたのね。そこは坊主って間違えないようにしていただきたいと思えますし。

それから、宮城県では話の終わりに「こんでえんつこもんつこさけた」「よんつこさけすた」とかっていう語り納めの言葉がくるんですよ。で、意味もよくつかめないまま、意味はあるんだろうと思うんですけども、「えんつこもんつこさけた」っていうことで、話を締めくくってまいりましたが、一郎さんはそこがはっきりしてました。

「〈縁も門も栄えた〉だぞ」

って言われるんです。話の終わりに、「縁も門も栄えた」。〈えにし〉という意味の「縁」ですね。それから「門」というのは〈一門〉ですね。〈縁も門もこの上なく栄えた〉。

「〈縁も門も栄えた〉だぞ」

っていうふうに語りの言葉をはっきりと、念を押して教えていただいたのも忘れられません。

じゃあ、そんな前置きが長くなってしまっているので、この辺りで止めたいと思いますが、そんな風にしてただ一度だけお目にかかってお別れしてきた二人の語り手から聞いた話を、今日は私どもの仲間に語ってもらいますので、お聞きください。まずは、『田螺の息子』で、長須賀直子さんと島津信子さんの二人。長いもんですから、二人に分けました。それでもね、すこしカットしてあるんですよ。とっっても片倉舜さんの話はみんな長かったんです。そして、続いて『一寸坊主』。木村一郎さんが語ってくださいました『一寸坊主』を、私どもの会の若い男性の寺嶋大輔さんに語っていただきます。よろしくお願いします。

\* \* \* \* \* 以下 民話語り \* \* \* \* \*

## 田螺の息子

原話語り 片倉 舜さん（東松島市矢本・大正十三年生）

語り 長須賀 直子・島津 信子（みやぎ民話の会）

むかし、あるところに、その日のかまどの煙も立たないような、貧乏な百姓の夫婦があったんだと。長者どんの屋敷に朝早く行って働いて、その日その日の暮らしをたてていたんだと。おまけに、子どももいなかったの、

「どんな子でもええ。我が子と名のつく子なら、蛇でもええ。なんとかならんものか」と、氏神さまにお願いしていたんだと。

ある日のこと、女房の腹が痛みだして生まれたものがあったんだと。なんと、それは田螺<sup>たにし</sup>だったんだと。

「田螺だとてわが子だもの。氏神さまの申し子だ。大事に育てんべし」ということになったと。

そうこうしているうちに、かれこれ二十年がたち、息子も二十<sup>はたち</sup>になった。田螺の息子は、食い物は食うが、ものも言わず、大きくもならなかったと。

ある日、年をとった父親は、長者さまに納める年貢を馬の背につけながら、「切ねえこった。氏神さまの申し子を授かったものの、二十年たっても田螺は田螺。一度でいいから、父<sup>とと</sup>、母<sup>むか</sup>と言うてくれ」と、こぼした。

すると、後ろの方でふいに声がした。

「父<sup>とと</sup>、そんじゃ、おれがきょうはその米を運んでやる」

父<sup>とと</sup>は驚いて、きよろきよろ辺りを見まわしたけれど、人のいる気配はなかった。

「おらを呼んだのは誰だ」

「おらだ。父<sup>とと</sup>、今まで面倒かけたけど、きょうからは、おれが働く」

父<sup>とと</sup>は、腰を抜かさんばかりに驚いたと。とにかく、早速氏神さまの棚から田螺を降ろし、米俵をつけた馬の背中に田螺を乗せてやったと。

すると、田螺は、

「それでは、父<sup>とと</sup>と母<sup>むか</sup>、行ってくるで」

ハイドウ、ハイドウ、まるで人が引くみたいに、上手に馬をさばいて、家を出ていったと。そればかりか、すきとおるようないい声で、

田螺どんや めでたいのう

愛宕参りに ござらぬか

いで候 いで候

と、ほのぼの歌っていったと。街道に行く人たちはたまげて、

「あれあれ、あの馬<sup>ま</sup>っこは貧乏百姓のとこのやせっこ馬じゃ。だれが歌ってんだべ」

と、ふしぎがったと。

田螺の息子は、そんなことには無頓着で、長者さんの屋敷に着いたと。

「それ、年貢が来たぞ」

下男たちがぞろぞろ出てきたが、立っているのは馬ばかり、馬子がいなかったと。

「はて、馬子がないのはどうしたべ」

「おら、ここだ。田螺だ。おれの体をつぶさねえように下さ降ろしてくろ。それ、そこの縁側さ置いてけろ」

と言う声がある。

見ると、馬っこの首に、田螺がちょっこんと乗っていて、一人前にももの言っていたんだと。下男たちは驚いて、

「旦那さま、旦那さま、たいへんでがす。田螺が、田螺が、米を運んできたてば」

長者どんも家の者と一緒に飛び出してきたと。立っているのは馬ばかり。

長者どんは、どうでもこうでもこの田螺をわが物にしたくなつたと。だが、貧乏百姓のじいさまとて、この物言う田螺をむざむざ手放すまい。そこで、長者どんは考えて、

「田螺どん、田螺どん、おまえの家とおれの家とは、爺さまの、そのまた爺さまの代からの出入りの仲だ。なんなら、わしの娘を嫁にやってもいいぞ」

と、持ちかけたと。

「それはほんとか、長者どん」

「ほんとじゃとも。二人いる娘のうち、どちらかをおまえにやろう」

長者どんは田螺と、かたい約束をしてしまったと。

父と母は、帰りがおそいので心配して、家から出たり入ったりして、思案していたと。そこへ、田螺が帰ってきたと。

「父、母、長者どんの娘を嫁にもらうことにした」

何を言うかと、父も母も話し相手にならなかったと。 [ここまでの語り：長須賀直子]

こちら、長者どんの屋敷では、上へ下への大さわぎ。長者どんは二人の娘をよんで、

「おまえたち二人のうち、姉でもいい、妹でもいい、田螺んどこさ嫁にいつてけろ」  
と言うた。すると、姉娘は顔色をかえて、

「おら、やんだ」

と言うなり、座をけて、どたばたと部屋を出ていつてしまったと。

長者どんは、妹にも同じことを言つたと。すると、妹娘は、

「たとえ相手が田螺じゃとて、約束は約束だ。おら、田螺んどこさ嫁にいくから、心配しないでけさいん」

と、やさしく返事したと。

長者どんの娘の嫁入りは、それは豪勢なものであつたと。

婚礼も無事にすんで、めんこい嫁ごが来てからというもの、掘立小屋もぱあっとあかるくなり、家の中からは父と母の笑い声が、はずんで聞こえるようになったと。

それにこの嫁ごは働き者で、「父さま」「母さま」と言つて、よう仕えた。野良に出れば、あたりの女房たちに負けずに精を出す。そんな時には、亭主の田螺を帯にはさんだり、腰に止まらせたりして一緒に行くんだと。そんなふうだから、ころころ笑つたり、はやり唄を歌つたり、いつも二人は一緒だつたと。

そうしているうちに春になって、愛宕さまの祭りの日がきたと。嫁ごは化粧して、晴れ着を着たと。そして、

「おまえさまも一緒に行くべし」

と言うと、田螺は、

「今日は天気もいいから、ゆっくり見物してこよう」

と言ったので、嫁ごはいつものとおり、帯の結び目に田螺を入れてでかけた。道々、大きな声で話しながら行くと、すれ違う人たちが、

「あれあれ、見てみい。あんなに美しい嫁ごがひとり言を言って笑っておる。かわいそうに気でも狂ったんだべか」

と、振り返ってささやくんだったと。

愛宕さまのところに来ると、田螺は、

「おれは、わけあって愛宕さまの門はくぐれねえんだ。ここで待ってるから、ひとりでお参りしてきてけろ」

と言うんだと。それならと、たにしを帯の結び目から出して、嫁ごは田の畔においたと。

「すぐにもどってくるから、烏に食われねえように、気をつけてけさえん」

そう言って、小走りにお宮の石段を登っていったと。

いそいそもどってみると、畔に田螺がないんだと。烏にでもさらわれたか、それとも田に落ちたかと、嫁ごは晴れ着をたくしあげて、田に下りたと。田には田螺がたくさんいたと。一つ、一つ拾ってみるけれど、亭主の田螺はいなかったと。拾っては捨て、拾っては捨てているうちに、とうとう嫁ごは、泣き出したと。

田螺どんや 田螺どん

ちよろちよろ 小川 泥んこ 田んぼ

あっちゃ こっちゃ どこいった

雉や烏 とんでいけ

泣きながら、こっちの田からあっちの田へ漕ぎまわるうちに、顔にも泥がはねあがり、すっかり泥まみれになり、見るかげもない有様だったと。祭りから帰る人たちは、

「狐にばかされたんだべ」

と、笑っていったと。

嫁ごは

「なじよしたらいかんべ」

と、愛宕さまの社にむかって手を合わせたと。

そして、亭主の田螺がいなくなったからにはいっそ死んでお詫びしようと、社の裏の池に向かって走り出したんだと。そして、池にはいって、深みのほうへすすんでいこうとすると、

「なにをする」

声がしたと。ふり向いてみると、そこにはりっぱな身なりをした男が、にこにこ笑って立っているではないか。

「おらの声に聞き覚えはねえか。おまえの亭主の田螺だ」

たしかに亭主のたにしの声ではあったと。亭主の声ではあるけれど、田螺とは似ても似つかぬりりしい男であったから、嫁ごはたまげて男を見たと。

「おまえのおかげで、田螺から人間になれたのだ。おまえの情け深さのおかげで、神さまがお

れを人間にしてくれた」

と、そういうんだと。

二人で連れだって帰ると、父も母も、腰を抜かしてしまったと。すぐさま、長者どんの屋敷に使いが走り、みんなで寄りあつまって喜びあったと。

それからというもの、夫婦二人で心をあわせて働いたもんだから、掘立小屋の家にもたと幸せがやってきて、やがて名にしおう長者と言われるまでになったとさ。

えんつこ もんつこ さげだどさ

## 一寸坊主

原話語り 木村一 郎さん（登米市米山町中津山）

語り 寺嶋 大輔（みやぎ民話の会）

むがす、あったづおんなあ。おじんつあんとおぼんつあんが、くらしていだんだと。

おじんつあんとおぼんつあんが、

「おぼこほしい、おぼこほしい」

って、毎日神様さ拝んでだんだと。拝んでるうちに百日がたって、満願になったれば、ある日、拝んで帰ってくつとごすたれば、社の中から赤ん坊の泣き声すたんだと。行って見たれば、一寸ばりのめんこい赤ん坊がいたがら、

「ああ、こいつは神様の授かりだあ」

って拾って帰ってきて、うめえ物うんと食せで育したんだども、はっぱり育んねがった。育んねがら、「一寸坊主」つつう名前づけたんだと。

で、あつ時、お爺んつあん、一寸坊主呼ばって、

「これ、一寸坊主、一寸坊主。貴様あ、なに食せでも、はっぱりおがんねがら、はあ、暇あ呉っから、なんでもほしいもの呉っから出で行げ」

って言ったんだと。

「んでえ、なにほしいか語れ」

って言ったれば、

「お椀こほしい」

「お椀こ、なにする」

「お椀こなあ、舟のかわりにして、川渡るとき使うんだ。あど、箸ほすい」

「箸はなにする」

「箸はな、櫂棒にして、舟漕ぐときつかうんだ」

「あど、なにほしい」

「あど、針っこほしい」

「針っこ、なにする」

「針っこ、腰ささして、刀にしてつかうんだ」

「ほかほか。んでえ、呉れっから行げ行げ」

ほうして、一寸坊主は泣きながらずうっと行ったんだと。ずうっと行つたれば、大っきな川

あったがら、そごをお椀この舟で渡って、大っきな島あったがら、そごさ着いたんだど。そごに神様あったがら、神様拜んで少し休んでいたんだど。そしたら、お姫様が家来ども連れて現れて、神様拝みさきた。

拜んで帰っ時、山がら鬼どもが出はってきて、そのお姫様食うどごすた。ほしたら、一寸坊主、暴れて出はってきて、

「この鬼ども、なにする一、おれが勝負する一」

って、出てきたんだど。そすたら、青鬼出てきて、一寸坊主パクッと食ったんだど。そすたら、一寸坊主、鬼の喉のどこさ行って、針っこでツグツグとつついだれば、青鬼、

「ハクション」

ってやって、一寸坊主、鼻がら出はってきたんだど。一寸坊主、また、

「この鬼ども、まだやるかー」

ってあばれだれば、こんどは赤鬼出てきて、一寸坊主ぱくっと食ったんだど。ほしたら一寸坊主、こんどは喉の奥通って、腹ん中入って、腹ん中でツグツグとつついだれば、赤鬼、痛くなって、ごろごろころがって、ほして死んでしまったんだど。今度は一寸坊主、口から出はってきて、

「この鬼ども、まだがー」

って言ったれば、あどは鬼ども、山の方さ逃げでいったんだど。

逃げでぐ時、延命小槌つつう宝物なげでったんだど。

ほうしてる内に、お姫様だの家来達だのが、木のかげから出はってきて、

「ああ、おめえのおかげで、命助かったがら、おら家さ来てくないん」

って言って、一寸坊主、お城さ連れで行ったんだど。お城さ行ったれば、お殿様出てきて、

「ああ、おめえのおかげで、おら家の娘助かったがら、おめえは命の恩人だ。おら家にながく居でくないん」

って言わって、鬼がなげでった延命小槌で、

「一寸坊主、おがれえ、おがれえ」

って頭の上で振ったれば、一寸坊主はたちまち大きくなって、りっぱな侍になりすたんだど。

ほうして、一寸坊主はお姫様の旦那殿になって、しまいには、そのお城の殿様になって、暮らすたんだど。

こんで えんも もんも さがえた

\* \* \* \* \* 以上 民話語り \* \* \* \* \*

小田嶋 — ありがとうございます。面白かったですね、「田螺たにしの息子」と「一寸坊主」のお話でした。授けられた子どもたちのお話を聞いていただきましたけれども、このお話を手掛かりとして、民話の中の子どもたちについてこれから考えていくのですけれども。そのひとつのきっかけになればと思ひまして、これから採訪のときに考えたこと、「こどもたち」について考えたことについて、小野和子さんに話題提供をしていただきますのでよろしくお願ひします。

記録 島津 信子(みやぎ民話の会、「民話 声の図書室」プロジェクトチーム)

### 3. 探訪者がとらえた民話のなかのこどもの誕生 その一

話題提供 小野 和子 (みやぎ民話の会、「民話 声の図書室」プロジェクトチーム)

#### 【願って授けられる子どもたち】

二つの話を聞いていただきました。一つは、子どもを願った夫婦に田螺の形で子どもが与えられた家族の話でした。その田螺がどのようになったかを語る話になっておりました。それから、もう一つの「一寸坊主」の方も、子を願った夫婦のところに子どもがやってくるんですけども、その子は、一寸、三センチにも満たない小さな子であったと語られています。こんなふうですね、子を願って神さまから授かる子どもたちの姿というのは、いつも特別な形をしているんです。そのことを、ひとつ考えてみたいと思います。

それから、ここに今語ってもらった話のおおよそを書いてもらいましたが、二つとも筋がちよっと似ているなあと思われるかもしれません。つまり、子どもが欲しいと氏神さまに頼むんです。神さまに頼むんです。つまり、子は産むものというよりは、授かるものという思想があったんでしょうか、神さまにお願いする。そうすると、神さまがその夫婦の願いをきいてくれて授けてくださる。

#### 【神は異形の子を爺婆に授ける】

授けてくださったものは、ここでは田螺でしたけれども、他には蛇の形をしていたり、それから蜘蛛なんていうのもあるんですね。それから、蛙息子なんていうのもありますね。そういうふうに動物たちの形をしたものが、なぜか神は子を求めた夫婦に授けるんですね。

それが、人の形をしたものと思うと、こんどは、『一寸坊主』とか、他に『親指太郎』とか、それから『五分次郎』なんていうのもあるように、異常に小さな形をした人間。それから、さっき力太郎のような垢太郎というふうに、お爺さんとお婆さんが自分の垢をこそげ落として人形の形にして、それを我が子のようにかわいがったというふうに、その授けられてくる子たちの姿は一様ではないんですね。

おかしい言葉になりますが、普通の、普通のって言うのもおかしいですが、赤ん坊としてまるまる太ったかわいい子が授かる話はひとつもないんです、民話の中に。子が欲しいと願った人のところに、神は必ず授けてくれるんですけども、そのときにはいつもこうした異形のもの、異なる形と言ったらいでしょうか、そういう形で子どもを傍へ置かせてくれるんですね。このことの意味は、どういうふうにとらえたらいいかと思うほどですね。それについて後ほどまた述べてみたいと思うんですが、筋立ては大体似てるんですよ。

#### 【育てられた子どもはやがて家を出る】

そうやって授かった子どもを、親は田螺であろうと小さかろうと一生懸命育てるんですよ。そこも、共通してるんです。一生懸命育てるんだけど、必ず一定の年齢がくると突き放してしまうんですね。突き放すというほど厳しくはないにしても、『田螺の息子』も親は思わず愚痴を言うんですね。

「庄屋さまに年貢の米を届けに行かねばならない、爺婆が行くのは大変だ。この子がどうして行ってくれないんだろう」と愚痴を言うんですね。そうすると、それをきっかけにその田螺は立ち上がるとも言いますか、自分で行こうという意味を表してくれるんですね。そして、馬に乗って年貢を納めに出かけて行ってくれます。

『一寸坊主』の方はどうかというと、いくら食べさせても大きくなると。たまらなくなつた夫婦はですね、「もうどうぞ出てってくれ」って言うんですね。そんなこと絵本になると書いてないんですけど

れども、語りではね、こういうふうに突っ放してんですよ。「どうぞ、お前はもう出ていってくれ。食うばかり食って大きくなってくれない。困ったもんだ。出ていけ」って言って。必ず家を出るんですよ。それはどの話も共通しているんです。

### 【外の世界に出た子は事をなし妻を連れて帰る】

そして、外へ出て行った世界で、一寸坊主も田螺の息子も頑張って仕事をするんですよ。広い世界へ初めて出て行って、そこで、なんとか仕事をして、そして、最後にお嫁さんを連れて帰ってくる。そして、お嫁さんと一緒に幸せな家庭を築くようなニュアンスで話が終っていきます。大体こういうスタイルをとっているんです。

授けられた子どもたちの話の成り行きをみますと、どんなものが授かっても、親は大切に育てる。でも、我慢できなくなる。そうすると、その子は家を出ていく。あるいは、家から追い出す。その子は、外の世界へ出て行って、初めて自分の力を発揮するとでも言ったらいいでしょうか。その発揮の仕方はいろいろあるんですけれども、そうして力を発揮して、お嫁さんを連れて帰ってくる、こうしてめでたしめでたしという、こういう形をとるのが大部分の話だといっているんです。

### 【蛇の息子を殺す『へびの四蔵』】

ただね、こういう話だけではありません。たとえば、やっぱり子どもを願った老夫婦のところにもたらされたのは、こんどは蛇でした。蛇という、みなさんにあげた資料にもありますけれども、『へびの<sup>しぞう</sup>四蔵』というとても悲しい、しかし心に刺ってくるような話ですけれども、その子はへびだったんですね。でも、へびだったとしても、氏神さまがくださった子どもだからって、お爺さんとお婆さんは一生懸命育てるんですよ。

でも、へびはだんだん大きくなって、座敷の中にとぐろ巻いたりするようになると近所の人は怖がるし、お爺さんとお婆さんも居場所がなくなってしまうから、「息子よ息子よ。どうぞお前は山へ行ってくれないか」って言って、へびの息子を山へ捨てに行くんです。そうすると息子も了解して、山へ捨てられるんですけれども、こんどは、山でそのへびの四蔵は、山から里へ食べ物を求めに下りてきて、里の鶏や犬を食ったり、ときには、子どもなんかさらったりして、とても悪いことをするようになるもんですから、それを聞いたお殿さまが、「その山の変な蛇を退治した者には、千両取らせるぞ」と言うんですよ。そうすると、へびの本当のお父さんとお母さんはですね、「あれはおれらの息子の四蔵に違いない。人の手にかかって死ぬよりは、俺たちが殺した方がいい」というんで、山へ行って、「四蔵よ」「四蔵よ」とへびを呼びだして、そして、「お前悪いけれども」と言って、親はそのへびを殺すんです。そして、お殿さまからご褒美を貰って、そこが民話らしいんですが、幸せに暮らしましたときということになるんですね。

四蔵はどうなっちゃったんだろうって、聞いた後で思うんですけども、ばさっと切ってしまうんですね。そして、お殿さまに貰ったお金で、お爺さんとお婆さんは、その後幸せに暮らしましたとき。ものすごく可哀そうなような、残酷のような、何とも言えない話も、子を願った親の中にはあるんですよ。

### 【子を殺そうとした親が子に殺される『嘘吹き太郎』】

それからね、こんなふう子どもを殺してしまう親は、民話の中に割にたくさんいるんです、実は。これは、現代の問題とも関わってくるかもしれませんが、例えば、やっとな手に入った子どもが、大きくなったら嘘ばかりついて困る。隣行っても嘘を言い、あっち行っても嘘言い、お客さんが来て、「お父

さんとお母さんどこ行ったあ」なんてきくと、「おどつつあんは、富士山が崩れたからって、麻の茎もって支えにつっかえ棒かけに行ったわ」なんて口から出まかせをいうわけですね。「おがつつあんはどこ行った」って言うと、「おがつつあんは、天が綻んできたから、シラミの皮千枚とノミの皮千枚もって、そこ繕いに行ったぞう」なんて、まず言うことが全部でたらめなもんですから。

親たちは、その息子を見ていてですね、「この子がこうやって大きくなって、あたりほとりの人に嘘ばかり言って暮らしたら、どんなにみなさんに迷惑かけるかもしれない」それでね、おかしいんですけど、「殺してしまおう」と言うんです。そして、ゴザを持ってきて、そこで息子をす巻きにして、海苔巻きみたいにぐるぐると巻いてですね、そして捨てることにするんですよ。こういうところ、淡々と民話はおそろしいこと言うんですね。そして、いよいよ海へ持って行って捨てるというときに、お婆さんはさすがに母親だから、「腹減っては可哀そうだから」ってあんこ餅をいっぱい弁当箱のようなのに入れて、ゴザの中に突っ込んでやるんですね。そうすと、お父さんは、それを担いで行って、海っ端に行ってドボーンって捨てちゃうんです。

そすと運よく、途中の木に引っかかって、子どもは助かるんです。そして、お母さんが入れてくれたあんこ餅をいっぱい食べて、頬っぺたにもいっぱい塗って、「ただいまあ」って帰ってきたわけですね。びっくりした親たちは、「あらあ、どうした。どうした」って。「おらあ、いま、竜宮城っていいところへ行ってきて、あんこ餅なんかたらふく食わされて、顔じゅう小豆だらけだわ。お父つあんなんか行ったら、酒っこ腹いっぱい嫌つつうぐらい飲ませられっぺなあ」なんて調子のいいこと言うもんだから、お父さんも、「そうかそうか」と思っ、「じゃあ俺も行って来る」なんて言うわけですね。こんどは、お父さんをす巻きにして、ゴザにぐるぐる巻いて、そして息子が捨てにいくんですよ。すごいでしょう、民話って、こういうことをさっと言うんですよ。

そして、海の上からドーンと落としてやると、お父さんは、ほんとに海の中に沈んで、死んじゃうんです。そして、お父さんの死体が上がって来たもんだからね、村の人は、「なんて息子だ。お父さんをす巻きにして海に投げて殺すなんて。こんな奴はただ置けない」って、こんどはまた息子を、村の人たちが舟に乗せて、海に流してやるんです。

そすと、息子は流れ流れていって、鬼が島に着いて、そしてその鬼が島に行ってですね、鬼たちをだましたりいろいろしながら鬼の宝物を盗んでくるんです。その宝の中に針がありましてね、その針はツクツと刺すと、死んだ人が生き返るって針であって。「あらあ、お父さんをツクツと刺すのかなあ」なんてえと、お父さんはもう終わりなんです、海に捨てられて。馬が死んでしまって困ってた人の馬にツクツと刺すと、馬が生き返るもんですから、お百姓さんを喜ばせたり。

それから、長者の娘が病気で死んでしまったのに、針を刺して生き返らせたりして、そのうそ吹き太郎というんですけど、そのうそ吹き太郎は、そうやってお金なんか貰っていい目にあうわけですね。そして、お母さんと幸せに暮らしましたとさって。お父さんはどうなったのかなって、最後まで出てこないんですけども、お母さんとだけ幸せに暮らす。

こういうところのね、民話の容赦なさっていうのは、やっぱりね、私たちは心して聞かなければならないって気がするし、こういう話は聞かせていけないって避けてもいけないのではないかと思わせられるんですね。

### 【子を海に流してやる『<sup>ちょうな</sup>手斧太郎』】

また、もう一つ例をあげると、<sup>ちょうな</sup>手斧太郎なんていうのあるんですよ。ご存じかどうか分かりませんが、私は、これは沖縄で会合があったときに出かけて行って、沖縄で聞かせていただいた話なんですけどね。

手が手斧ちやうなだったっていうんです、生れて来たときに。手斧ちやうなって、手の斧ちやうなって書きます。手が刃物のようになっている子が生れたそうです。手斧ちやうな太郎っていう名前を付けられて、その子は、手が生まれつき刃物のようになっていますので、うれしいとき、人にこうやって抱き着いても、人を傷つけてしまうんですよね、うれしくても。それから、かわいそうな人のそばに行って撫ぜてやろうとしても、手が刃物ですから、撫ぜた先から逆に怪我をさせてしまっ。彼は、手斧ちやうな太郎は、どんなに一生懸命やろうと思っても人を傷つけてしまう。

そうすると、親はやっぱり心配して、「このままではこの子は幸せになれないだろう」というんで、やっぱりね、舟に乗せて海へ流してやるんです。そうするとね、手斧ちやうな太郎もやっぱり、都合がいいんですけど、鬼が島に行って、鬼が島で鬼たちを手斧ちやうなの手でやっつけてですね、そして、宝物を持って帰ってくる。帰る舟の中で手斧ちやうなの手がポロポロと落ちて、そして、普通の手になったんだとき、っていうようなこんな話もあるんですよ。

### 【授けられる異形の子どもたち】

ですから、ひとつの話は、子どもを授かった人の話は、今語っていただいたように立身出世してお嫁さんを娶っていくというような形で語られることもあるし、または、その子を殺さなければならないというような羽目に陥っていく親たちの姿も仮借なく語っているわけなんです。

ここで、私が問題にしたいのは、「子のない百姓夫婦が、子どもを願って田螺が生れたので、夫婦は子として育てる」ってあるように、ここが今も言いましたように田螺ではなくて、蛇だったり、蜘蛛だったり、蛙だったりして必ず小さな動物の姿で生まれてくることが多いのです。水辺にすむという言葉をつけてもいいでしょうか、水辺にすむ小さな動物の姿で神は子どもを授けます。そうでなければ、一寸坊主のようにすごく小さな小さな形での子どもを授けているんですね。どうしてなんだろうかと思うでしょう。例外がないんです。子を願った夫婦に丸々としたかわいい子が授けられるという話は、ほんとにないんです。みんな不思議な形をしたものとして子どもを授けているんですよ、これは何だろうって、とても大きな問題であるような気がいたします。先祖は、ここんところに何を託そうとしたのかなっていうことを思わずにはいられませんでした。

### 【稀有な語り手 永浦誠喜翁】

そんなことを考えていたときにですね、私が非常に尊敬する、そして大切なお付き合いをさせていただいた、今の登米市の南方町に住んでいらした永浦誠喜さんっていう方から、とても暗示に富んだ言葉を聞かせていただいたことがありました。

永浦誠喜さんについては、映像で語りを聞いていただいたこともあるし、永浦誠喜さんはどういう方かを、みなさんにお話したこともあったかと思うんですけども、ちょっともう一回だけ話させていただけますとね、永浦誠喜さんは、おひとりですね、二百七十八話も私たちに語ってくださったんですよ。信じられますか。二百七十八話の話を私たちに語ってくださったお爺さんなんです。それでね、わたしは、永浦誠喜さんが七十代のときに二百七十八話を聞きました。一話一話とても丁寧な語りなんです。そして、こんなに人間って話を憶えられるもんだろうかと私は思いました。

それでね、ちょっとけしからんことだったという気も今はするんですけど、永浦さんが、「おれ九十になったぞ」って私に言われたときに、「もう一回、こないだ七十のときに聞いた話、全部聞かせてください」って頼んだんですよ。疑ってたわけじゃありませんけれども、もしかすると、そういう気持ちがあったかもしれません。こんなに憶えていられたら、二十年も経ったら物語はどんなふうに変形したのか

ということも知りたかったんですよ。

そして、永浦さんに恐る恐るそれを頼んだら、永浦さんは、「ああ、いいよ」と言って、九十になられたときに、また先に語った二百七十三話を語ってくださったんです。私は、仲間と一緒に月に1回ずつ永浦さんを訪れて、そして、三十、四十と語っていただくということが続けました。そして、そのときに語っていただいたのを後に活字にするんですけども、こういうふうな『みやぎ民話の会叢書 第十集』を示して] 活字の本にしましたけどね。これは上巻って書いていますけども、実は上、中、下と三巻になっても、まだこれに盛りきれなかったくらいなんですよ。すばらしいお爺さんでした。

そして、七十のときに聞いた語りとすっかり同じだったんです、九十のときに聞いた話が。ほんとに擬態語も擬声語も物語の筋も、みんな同じだったんです。それを、「自分は小さいときから、何度も何度もお祖母さんに聞いたから、このように憶えているんだ。このようにしか語れないんだ」と言って、同じように二十年前の話を二百七十三話してくださった。これは奇跡だと思うし、学問的にも非常に価値のある記録だと自負しておりますけれども。やっぱり永浦さんの語りは、そういうんだったんですね。「子どものときなんにもないし、ランプの下でお祖母さんから話を聞くのだけが楽しみだったので、お祖母さんの手が休んで座っていると、傍に行って語れ語れと言って語って聞いた」と、こういうわけなんです。

### 【永浦誠喜さんの『鬼打ち木のいわれ』】

永浦さんの話は、みんな含蓄に富んだもので、一話一話取り上げて、検討したいくらいの気がする話なんです。その永浦さんが語ってくださっている話に、『鬼打ち木のいわれ』というのがあるんです。「鬼を打つ木」と書いて『鬼打ち木のいわれ』という話がございます。それは、お正月に飾る門松の松と竹の脇に必ずクヌギのつかえ棒をする、先のとんがった。そのクヌギのつかえ棒のことを「鬼打ち木」と言うんだそうです。ですから、めでたい松と竹の脇に鬼打ち木を必ず添えて、門松が初めてめでたいものとして成り立つという話、そういうふうな結論にいきつく話なんですけれども、この話はずね、とっても面白い話だったんですよ。

### 【口のない嫁ごほしい】

どんな話かと言いますと、ちょっとかいつまんでしか言うことができませんけれども、前半はね、この前私どものゆうわ座でもやりました、「食わず女房」の話なんです。つまりね、口のない女が欲しい、口がなくてご飯を食べない嫁が欲しい、稼ぐだけ稼いでくれる嫁が欲しいって、けしからんことを願う男がいるわけですね。そうするとそういう口のない女おなごがやってきて、「おれは口がないし、稼ぐだけ稼ぐから」って言うので、それで男は喜んでお嫁さんにして稼がせてるわけですね。

ところがどういうわけか米が減っていくのね。「あらあ、こいつ食わないはずなのに、なんで米だけ減るんだろう」と思って、ある日出かけたふりをして、こっそり陰に隠れて見ていたら、その女は大きな釜にご飯をいっぱい炊いて、そして炊いたと思ったら、髪の毛をぐらぐらっとしたら、この口は無かったけども頭に大きな口が有って、そしてそこへ米を投げ込んだっていうんです。「おまんにちべろべろ」とか、いろんな唱えごとしながら、その米を全部投げ込んで、すましてるから、男はたまげてくださいね、化け物だと思って、ひいーって言って逃げだしたら、その女が追いかけて来たっていうんですね、正体を見せて。

それで、男は逃げて逃げて、そして蓬・菖蒲の生えている湿地の側に身を潜めたら、その女が、「おれは蓬菖蒲には勝てない」と言って、そしてすごすごと山へ行っただっていうんです。それで、それから男

の子の端午の節句には、蓬菖蒲を軒端に差して、こういう悪い女にたたられないようにしましょうということで、非常に男に都合のいい話なんですけども。「口のないう嫁ご欲しい」なんて言ってみたりね、最後は男だけそうやって守られて、そして女の方は鬼の国に帰っていった。そういう話が「食わず女房」という話なんです。

### 【人の世界と鬼の世界】

永浦さんの話にはね、この後に続きがあるんですよ。どういう続きかって言いますとね、ちょっと読んでみますとね。「ところが、なんぼ口のねえ鬼の嫁ごでも、下の口はあったらしくてね、いずれ夜には仲良くしてたらしいのね」と、こう話が展開していくんです。「そしてね、嫁ごの腹さ子ども入って、十月十日経ったら男の子が生まれたんだと」ってこういうふうになってきたんですよ。それでね、追われた女はですね、お腹に子どもを宿したまま自分の鬼の国に逃げて行って、子どもを産むんです。

でも、鬼の国では、「この子は人間みたいだ、人間みたいだ。鬼じゃねえ、鬼じゃねえ」って軽蔑されるもので、母親の鬼は悲しくなって、その子を連れて人間の世界にやってくるんですよ。そして、人間の世界のお父つあんのところに置くのね。そうすと、お父つあんも、その子を育ててるんだけど、こんどは人間の世界では、「なんだ、こいつ鬼のように角があるんでねえか、人間じゃない。手の爪もおかしい」って言って、また排除されるもんですから、鬼の子どもは、何回も行ったり来たりするんですけども、どっちに行っても認められないもんですから、とうとう、そのお正月の門松の支え棒に使ってあったクヌギの木に自分の頭をぶつけて死んじゃったって言うんです。それで、「鬼打ち木」って、そのつかえ棒にするクヌギの木のことを言ってるんだ。

### 【人はすべて障害を持って生まれる】

でえ、永浦さんは言われるんですね。「正月のめでたい門松、松と竹、それは大事に違いない。でもその脇でそいつを支えている、そこに頭をぶつけて死んだ鬼の子どもの鬼打ち木があって、やっとな門松なんだっていうふうにおれは思った」って、こういう話をしてくださったんです。面白い話でしょう。びっくりするでしょう。

そして、永浦さんはそのあと、この話をしたあと私にこういうことをおっしゃたんですよ。「なんか足りねえがったり、なんか余計にあったりする、それが人つつうもんでねんだべが。目に見えなくても、見えても、人間つつうものは、みんなそういうものでねえべが」。なんか足りなかつたり、なんか余分だつたりする。そういうものが人っていうものではないだろうか。つまりね、満ち足りた存在でなくて、なんか欠けたり、なんか反対に余計だつたりする。その意味で人間っていうものは、すべてですね、別の言い方をすると障害をもった存在なんじゃないだろうかということを、永浦さんが、私にぼろっとこのとき言われたんです。私は、永浦さんの尊い言葉を命がけで拾ったって言いますか、今もよく覚えているんですけども。「人つつうものは、みんなままとまったようなものはないんだ。門松がめでたい松と竹と、そこに鬼の子が自殺した木、悲しい木を添えて、ようやくめでたい木になっているってことを、人は忘れてはいけない。人つつうものは、みんななんかかんか半端であり、足りないものであり、そういう意味では障害を持つものなんだということを、そのとき永浦さんは言われたんですね。

### 【民話のなかの「こどもの誕生」】

それで、私ははっとして、子どもの誕生にかかわる民話のなかで、先祖は繰り返し繰り返し丸々とした子どもを授けないで、蛇とか蛙とか蜘蛛とか、そういうような異形のものとして授ける。そして、そ

の授けた子をどう育てていくかということ、まるで親に質問するかのように押し付けている。親は親でその子どもを育てたり、たまらなくなつて殺したり、あるいはそこから逃げたり、いろいろするわけですが、そうやっていくのが、親と子というものではないかということ、永浦さんはそのとき、今話した『鬼打ち木のいわれ』の話をしながら、ポロッと洩らして下さったんですね。

それで、私どもの先祖が子を願う夫婦に対して、その願いを聞き届けて子どもを授ける。しかし、その子たちはみんな異形の、人間の側からみればということですが、蛙とか蛇とかそういうものとして授ける。人の形をしているとしても、とても小さかったり、あるいは垢でできていて水に溶けてしまうものだったりするように、十分な子どもを一人も授けていないんです。

### 【なにかが欠けた異形のものとして生きる】

そのことは何を意味するのかわからない、ここで話題提供ということで話させていただいている私も、こうして聞きに来て下さっているお一人お一人のみなさんも、みんな何か欠けた異形のものなんだという自覚ですね。人間っていうものは、みんなそういう形で存在しているからこそ、ものを考えなければならぬし、手をつながなければならぬし、ということにも結びついていくかと思うのですが、永浦さんは、そのことを、「鬼打ち木」の話をしながら私に教えて下さったと、私は思って、それを受け取ってまいりました。

そして、その授かる子どもたちというのは、夢のように五体満足全部そろった子、どんどんよく成長していく子っていう、誰でもイメージは持つんですけど、それは一種の絵空事であって、ごく特定のことであって、人間というものはあなたも私もみんな半端者であり、障害を持つ者なんだ。それは、目に見えるか見えないかは別ですけども、そういう者として世に生を受けてくるんだということと考えながら、育てて過ごしていくべきではないかってことを、先祖はこの子どもの誕生の中で繰り返し言っているのではないかというふうに、私は永浦さんの言葉を聞きながら思いました。

私が言っていることが正しいかは分かりません。けれども、民話の中に一つも赤ん坊がいない、みんな蛇だったり、いろんなものだったりする。そして、人間の形をしていたとすれば、非常に小さかったり、役に立たなかったりする、そういうものを送り続けてきたことの意味を私たちは考えてみたいと思うんです。子どもを受け取った爺婆が、それをどう受け止めていくかということこそが、人がどう生きるかということと関連付けられてくることだろうと思わずにはられません。

### 【松谷みよ子の『おんぶおばけ』】

私のつたない話は、ここらでちょっと切らせてもらって、あと舌足らずの処は質問などをいただきながら説明させていただいて、一応の終わりにしたいと思うんですが、その終わりのために、私は一冊の絵本を読ませていただきたいと思います。それは、松谷みよ子さんによる『あかちゃんのむかしむかしおんぶおばけ』という話です。これは、『あかちゃんのむかしむかし』というシリーズで、松谷さんが書いておられる絵本なんですね。この絵本をちょっと遠くから絵が見えないと思うので、言葉だけ読みますから聞いていただきたいと思います。こういう話なんですよ。

\* \* \* \* \* 以下 絵本読み語り \* \* \* \* \*

『あかちゃんのむかしむかし おんぶおばけ』

松谷みよ子 文 ひらやまえいぞう 絵 (童心社 1992年)

むかし くらいもりがあって  
こわーいこえが きこえてくるんだって

おんぶしてえ おんぶしてえ

みんなこしをぬかしてね  
たすけてえー たすけてえー  
ってにげてくるんだって  
むらいちばんのちからもちもにげてきたし  
おすもうさんにもにげてきたし  
おさむらいさんにもにげてきたって  
ぶるぶるぶるぶる

あるとき ひとりのあばあさんが よるおそく そのもりをとおったの  
そうしたら でたあー  
おんぶしてえー おんぶしてえー って  
おばあさんこわかったけどね  
おなかにちからをいれてね  
おんぶしたいなら おんぶしてやるよっ  
せなかをむけたって

すると  
ひゅーっ どーん  
なにかがせなかに とびついたの  
おばあさんは ひょろひょろしながら  
もりをぬけて うちへかえったって  
おじいさんただいま  
うちへは行って どっこいしょっておろしたら  
おんぶおばけは かめだったの

なかからでてきたのは  
おおばんこばん きんのおかね  
おや まだあるよ  
たいこがひとつ  
わなげがひとつみ  
あめがっぽん  
そうしたらね  
ばあーってこえがして

あかちゃんがでてきたの！  
おんぶおばけは あかちゃんだったの  
おにの あかちゃん

ねんねんよー  
おころりよー  
こどものいない あばあさんは  
よろこんで おんぶして  
みんなで しあわせにくらしたって

\* \* \* \* \* 以上 絵本読み語り \* \* \* \* \*

ここに、鬼のあかちゃん、角の生えたあかちゃんをおんぶしたお婆さんが、幸せそうに「ねんねんよーおころりよとう」と言っている絵で物語は終わっています。すごい話だと思うんですよ。穏やかに聞いて、「おんぶおばけはあかちゃんだったの。おにの あかちゃん」というこの一言で、やはり、この本を読むお母さんやあるいは、若い者たちは心に深く思うものがあるんじゃないかと思います。そんなことを、民話の中の子どもたちの姿で誕生はどんなふうにしたかという処で、先祖は私たちに語り続けているのではないかと思います。ひとまず、私の訳の分からないような話をここで切らせていただきます。(拍手)

**小田嶋**—ありがとうございます。みなさん、いろいろなことがここで話題提供されて、一度に消化されるのは難しいかもしれないんですけども、いろんなことが話されました。子どもが、爺婆に授けられるお話、その中でも神さまに願って神さまから授けられるお話、めでたしめでたしで終わるお話もあったんですけども、実は親殺しだったり子殺しだったりということがさりげなく語られているお話もあるんですね。いわゆる民話のイメージとはちょっと違うものが、実はその中に含み込まれている。なおかつ永浦さんのお話。でえ先生、鬼と人間の両者の子どもは「片子」というのでしたっけ。

**小野**—はい、そうですね。鬼と人間の半々の子どもをカタとかカタコって呼んだそうです。片方の片という字を書いてね。鬼打ち木というもののいわれは、片子がそこで（鬼打ち木に）自分の体をぶつけて死んで、鬼打ち木ができた。その打ち木は、正月のめでたい門松を支えている。めでたい門松の背後には、こういう悲しいというか、こういうものが支えになっているっていうことを忘れないでねって、永浦さんは言われました。

**小田嶋**—はい、ありがとうございます。鬼でもない人でもない片子というんだそうです。われわれは自分を人だと思っていて、さらに日本人で、単一民族でとか思っていますけれども、でもほんとにそうなのかなってということも考えさせられるような話だと思います。

記録 加藤 恵子(みやぎ民話の会、「民話 声の図書室」プロジェクトチーム)

#### 4. みなさんと感想や意見の交換 その一

司会進行 小田嶋 利江 (みやぎ民話の会 「民話声の図書室」プロジェクトチーム)

**小田嶋**—ここで、前半を締めくくるにあたって、みなさん、そうした子どもが授けられるお話の中で、その授けられる形について、自分のいろんなことに引きつけてでもいいんですが、なにか感じたことやあるいは聞いてみたいことなどありましたら、どなたかありますでしょうか、ありませんか。

**参加者A(男性)**—面白い話で、最初に朗読で聞いた「田螺の息子」の話の感想みたいになってしまうんですけど、小野さんの話された異形の形で生まれてくるときに、なんか田螺の息子が最後かっこいい人間になってしまう。なんかそのときにぼくは、個人的には、田螺の息子のまま田螺の状態のまま、幸せな感じに終わりたいなと思ったというか。少しそれである意味、普通の人の形になってしまったっていうことに、なんか少し僕は寂しい気持ちになりました。

**小田嶋**—ありがとうございます。とってもよく分かる気がします。物語としてその物語の世界の「めでたしめでたし」の形で終わるように物語として展開していくのはよくあることではあるんですが、でもそれと現実の世界とが裏表になっているときに、もう少しその現実の葛藤とかやりきれなさとか、それをそのまま解決したいなあとというそういう気持ちなのかもしれませんね。先ほどお話された『蛇の息子』は、めでたしめでたしでは終わらないんですよね。でも、蛇は蛇のまま殺されてしまう。だから、その物語としてめでたしめでたしで終わる話と、そうではなくて、現実の世間さまとの葛藤とかそうしたものを、そのまま物語の終わりまで持って行ってしまっているお話と、あるいはいろいろあるということかもしれませんね。ありがとうございます。あとなにか感想でも質問でも…

**参加者B(女性)**—私の祖母の世代なんですけども、父方も母方もお墓参りなどしますとね、裏に、祖母の代で子どもが例えば五人とか六人とか生れていても、生後間もなくとか、二才とか、そういう小さい時期に亡くなってる名前が刻まれてたりするんですね。私が子どものころは祖母からそういう話を聞いたことがなくて、「ああ、こういうことがあったんだねえ」とか、「うわあ、大変だったねえ」とかっていう感じは、後から持つような思い出があるんです。昔は、多産ではあったけれども、子どもは育たないということの方がたくさんあったと思うんですよね。それからあと、次男三男とか農家に居たとしても、次男三男は外に出ていくものなんだよっていうふうなことが習わしとしてっというか、ずっとそこには居られないっというような環境もあったと思うんですね。そうすると、子どもに聞かせる話としては、「もういろんなことがあるんだよ」ってことがね、やっぱり親であったり、そのお祖父ちゃんお祖母ちゃんから、こう聞かされて育つということがどんなにか大切なことで、人生の長さといろんなことがあるっということを含めてね、年長者が子どもに聞かせて、こう上手に育ってくれよという、いろんな願いを込めてね、そういう話が生れてきたのかなあということもちょっと感じました。

**小野**—とても大事な指摘をありがとうございました。ほんとに、私どもも聞くと、七人兄弟だけど二人しか生きていないとか、極端に言えば、子どもたちは、当時は医療の関係もあったかもしれませんがけれども、生れた子どもが亡くなるっことは数の上ではとても多いことに、心が痛むことがしば

しばありますよね。そして、家を継ぐってということで、長男は大切にされてくるんですけども、次三男になりますと、お金持ちの家は別としまして、家を出ていかなければならない。ですから、農家の次三男が家を出ていった話が、民話で取り上げられているものも沢山あると思うんですね。さっきちょっと話した「食わず女房」の男も、桶屋だったり大工だったり百姓だったりするんですけど、「物食わないで稼ぐ嫁が欲しい」くらい、追い詰められてるわけでもあるんですよ。それは、やっぱり農家の次三男の人の辿る一つの運命と重なってくるかと思います。そしてね、とても面白いんですけど、今私が話してきたのは全部男の子なんです。女の子が一人も出てこなかったでしょう。これについては、どんなふうにみなさんは考えられるかなあと思って、みなさんに聞きたい気持ちがありますが、神が授ける異形の子どもにしろ、小さな子どもにしろ、みんな男で、女がないんですよ。不思議でしょう。どうしてかなあと思いますよね。でも、そういう形で男の子ばかりを物語は語っている。やっぱりそこには、その意味があるんだと思いますね。…あ、どうぞ。

**参加者C(女性)**—なんか質問されてることにあうかどうかは分かんないんですけども、私は生れてくるときに、小さな動物の形やら水辺の生き物って、そういうふうになっていくのはどうしてかなあと考えたときにね、やっぱりまるまると太った子どもが授かった場合に、いつも神さまにお願いしながら授かるような状態の爺さん婆さんの処に生まれたら、食べていくのだから大変なときに、その生活に見合った形かなあとも思ってみたり。欲しい欲しいと願って授かっても、育てるっていうのはそんなに簡単なもんじゃないよっていうようなね、そういう思いも味合わせようとされていたのかなあとか思ってみたり。それと、あと、蛇の話のときに、村に迷惑をかけるその蛇を我が子だけでも殺さなくちゃいけないという、そういうのだから、今の生活以上に昔の暮らしの中には、その住んでいるところの和を保つというために、人の迷惑にかかるということとはとんでもないことで、村八分にもなったり、いろんなことのもとにもなるというような蛇の世界でも同じような周りに迷惑をかけることは、自分たちの暮らしのもとだって侵されることにもなるかもしれないとかね、だから昔話の中で、その話のおもしろさとかそれだけじゃなくて、やっぱり祈って授かったものを守っていくことの大変さとかそういうのと一緒に、なんかどうしたらいいか分かんないんですけど。でえ私の祖母のところの話の中に、私の母が嫁ぐときに、自分がいってしまうと弟はもう亡くなった後で、嫁に欲しいと言われても、そうするとこの家がつぶれてしまうから、だから跡を残さなくちゃいけないから、養子をとらなくちゃいけないとか、そういうふうな時代があったりしているものですから、なんとなく跡取りをその家を存続させるための跡を残すために、男の子の形が多かったのかなあとかいろんなことを思いました。まとめられませんがそんな思いでした。

**小田嶋**—ありがとうございます。ご指摘いただいたことは、それぞれなんかすごく当てはまるような気がいたします。村の世間体とか、共同体の中で迷惑がかかるということをそれが親と子の葛藤になっているのが、やっぱり、『蛇の息子』とか『うそ吹き太郎』とか、そういう親殺しや子殺しにつながるような後半の話は、みんなそういう「世間さま」という言葉が出てくるのが特徴なのかなあと思いました。あとなにかありますかでしょうか…はい。

**参加者D(男性)**—あの、先生の話聞いて、民話と言うの私は仙台弁で喋っている話なんですけども、民話も同じじゃないかなあと感じるんですけども、こうやってみなさんの顔を見ると、大体昭和生まれの方がほとんど懐かしく聞いていると思うんですよ。でも最近、私紙芝居なんかで『桃太郎』と

か『一寸法師』とか、あと私たちの時代には『サルカニ合戦』。今なんて言うんですか？ 今も『サルカニ合戦』と言いますか。そういう時代になってきて、結局桃太郎の話すると、鬼が島に行って分捕ってきて、宝物を分捕って来たんだ、だから、今の時代には合わねえんだと。そういう話やら、それから、『サルカニ合戦』で、お母さんカニがサルに生柿、青柿ですか、ぶっつけられて潰れて、そのカニの体から子どもがいっぱい出てきて、そしてサル退治をすると。それは、あまりに残酷ではないかと。それから、二宮金次郎は、本を読みながら歩くから、交通事故に遭って死んでしまうからおかしいんでないとか。そういう話が、耳に入ってくるんですよね。それで、うんとやりにくくなってきてるんですけども、例えば、私八十六になったからそっちこっち話がとんでしまうんですけども、二宮金次郎は、最近立ってるんじゃないで座って本を読んでも像がでてるとか。それから桃太郎は、鬼と仲良くなって鬼からお土産をいっぱい貰って帰ってきたんだって話が変わってきたり。それから、カニは怪我をしたんだけど病院に行って治って、それからサルが「ごめんね」って言って仲直りしてめでたしめでたしという話が変わってきているんですよね。そうすると、昭和の人たちは、今まで「ああ」「ああ」って、私なんかは何回も親父から聞かされて、『桃太郎』の話なんか半分くらい聞いているうちに、いつの間にか寝てしまって、毎日、「むがあしむがし」って、いっそそごとこぼり憶えて、あとは半分は全然<sup>じえんじえん</sup>分かんなくて、「むがあしむがし、爺さんと婆さんがいでえなあ」っていうのばかり頭に憶えてて、最後は全然憶えていないですよね。そうやって育ったもんですから、これからそういう昔のことを、私は子ども時代にうんと楽しく聞いていたのが、全部覆されてしまう時代になってきているので、これから民話っていうのは、せっかく先生がこうやって苦労してつくった民話がいっぱいあるんだけど、こんどの令和の時代になったら、この話はどこまで続くんだろうなあっていう、なんかこう寂しさっていうんですか。先生もう少し頑張って、みんなもう百年の時代ですから、もっと長生きしてね、この話をずうっと聞いて、そして先生が長生きしている間は私たちも一生懸命聞いて、そして「むかし」を思い出してもらいたいって、そう考えるんですけどね。先生、その辺どうなんでしょう。聞かれたらなんと答えたらいいんでしょうね。大体、この間孫が来てね、「爺ちゃん、爺ちゃん。カブトムシ動かなくなったから電池入れてえ」って言い張ってね、まあそういう時代になってきたもんですから、大人の民話も子どもの民話もあるんですけども、子どもに聞かせる、孫に聞かせる話もどういうふうに変えていったらいいのか、先生も悩むところだと思うんですけども、どんなもんでしょうね。

**小野**—そうですね。今発言された方は八十六歳って言われましたね。八十六歳と言われたでしょう、私は八十五歳なんです。もうすぐ六歳になるんですけども、だから時代は同じようだと思いますが、やっぱり民話も、時代の中で形を変えていくものもたくさんありますので、そういう中で、今のよな話をみなさんと一緒にすることによって、形を変えないでいきたいと、少々辻褄が合わなくても少々おかしくてもなんでも、そこに先祖が込めた思いは何だろうかということを追究していくことによって、その話を正しく理解して受け継いでいくっていう、そういう仕事がかこれから必要になってくるような気がするんですね。そうでないと、どんどん、電気を入れればなんでも動くようになると思うような子どもばかりが育っていくのは、やっぱり少し悲しいという気がしますね。かといって、変化していくものを無理やり止めることもできないわけなんですよね。だから、このような会を開いたり、あるいは民話の語りの勉強をされたり、民話にかかわったりしながら、民話というものの本質を理解する大人が増えていくことによって、民話は変形しないで、正しく細々と命を燃やしていくんじゃないのかと思いますので、そのためには、私も老齢ながら頑張ってるんところ

に立って話をしてるわけなんですけれどもね。どうぞ、がんばってください。(拍手)

小田嶋—ぜひ発言したい方がもしありましたら…あ、はい。

参加者E(女性)—私は、今日、誕生というふうなことでうかがったんですけども、内容を聞いていると、子どもを育てるというふうな内容がとても多かったような気がします。うちも子どもがいるんですけども、なかなか思うようにはならず、いつもいつも喧嘩をしている状態でして、子育ては本当に難しいなあ、上手くいかないなあっていう思いがともしていたんです。でも今日のお話を聞くと、それは私だけではなくて、昔の人が昔っから親の思いはこうであっても、子どもはなかなか思うように育っていかないんだなっていうことが、昔からその思いがあったということに気が付いて、私だけじゃないんだ、みんなそうなんだ、みんな子育ては難しくって悩みながらこうきてるんだってことが分かって、ものすごい力強いような気がして、パワーをいただきました。これからも、うちは喧嘩をしながらいくと思うんですけども、ああ、これは昔から人類のテーマなんだと思って、それで取組んでいこうと思います。最後の「おぶっちえ」の話なんですけども、私は子どもを決して愛してないわけじゃなくて、たっぷり愛情を注いできたと思ってるんですけども、子どもというものは、こんなに可愛がってもまだまだ足りなくて、もっともっともっと求めてきて、私はもう潰れそうになるんですけども、その「おぶっちえ、おぶっちえ」っていう、そういう「おぶっちええ、おぶっちええ」って、いくら愛しても愛しても、まだまだ子どもは足んない足んない足んないってくるもんなのかあって思って、まあそういうもんなんだと思って、私も一生懸命可愛がったんですけども、まだまだ不足って言われても、みんなそんなもんなんだと思って、すごいパワーをいただいて安心しました。今日はありがとうございました。

小田嶋—ありがとうございました。これで半分なんです。今まとめていただいたようことにもなりましたが、ひとまずこれで前半を終わりにしまして、十分ほどお休みをしてから、後半に行きたいと思います。前半は、爺婆が子どもを神さまに願って授かったお話なんですけど、後半は、全く願ってもいないけれども、偶然たまたま子どもが授かってしまったお話なんです。それを三時ころから始めたいと思いますので、みなさん、十分休憩していただきます。よろしくお祈りします。

記録 加藤 恵子(みやぎ民話の会、「民話 声の図書室」プロジェクトチーム)

## 5. 「こどもの誕生」の民話の映像を観る

語り手紹介 山田 裕子 (みやぎ民話の会、「民話 声の図書室」プロジェクトチーム)

小田嶋—準備が整ったようですので、後半始めたいと思います。前半は神様に願って子どもを授かったお話ですが、今度は願ってはいないんだけど、たまたま子どもを授かったという、たまたまというのも変なんですけども、そういうお話、『桃太郎』と『瓜こ姫』がありますけれども、それについて、まず代表的な『瓜こ姫』の語りの映像を観ていただこうと思います。語りは佐々木 健<sup>つよし</sup>さんです。その紹介を山田裕子さんをお願いいたします。

### 【遠野郷の語り手 佐々木健さんとの出会い】

それでは佐々木健さんの紹介をさせていただきます。今までですと、健さんがこの前の座席の辺りにいて熱心に聞いてくださったんですけども、いらっしゃらないのはとても寂しいです。佐々木健さんは、今は利府町に住んでいらっしゃいますが、生まれは岩手県遠野市宮守で、昭和十二年のお生まれです。

私たちの会で初めてお会いしたのは、小野さんがお話していましたが、宮城県の民話伝承調査のときに「民話好きな人がいるから」というので、健さんをお訪ねしたのが初めてでした。そのときは、まだ四十代という若さで、とてもお若かったんですね。

そのときに、健さんは何人かの方を紹介してくださったんですが、そのときに行った民話の会の仲間が、「健さんもなにかお話していただけませんか。もしかしたら知っていらっしゃるんじゃないですか」と言ったら、「そんなこと言われても、こまるんだよね。私まだ若いし、そんなこと頼まれてもこまる」っておっしゃったそうです。そして、「ただ、頭のなかにもやもやとするものがあるけど、とても今は出てこない」って言われたということです。

でも、それから数日して電話をいただいたんですね。「みんなが帰ったら、むかし小さい頃に遠野で聞いた話があじ出されて、寝ても覚めてもそのことばかり考えてこまる。来てくれ」って、そんなふうに電話があったそうです。それで行って見たら、「小さい頃に、明治十五年生まれのおばんつあんに抱かれながら、負ぶわれながら、それから寝るときも毎日毎日聞かせてもらったその話が、頭のなかからだんだんに出てきて、それでもう仕事も手につかないでいる」ってお話があったそうです。

### 【佐々木健さんと民話】

お話を聞かせてくれたのは、健さんのお祖母<sup>ばあ</sup>さんのさとさんっていう明治十五年生まれの方で、寝るときに布団のところのここの首のところを、とんとんと叩きながら毎晩のように昔話をしてくれたんだそうですね。「寝ろや寝ろや、早く寝ろや」って言いながら語ってくれたお祖母<sup>ばあ</sup>さんの姿を思い出したら、昔話が出てきた」っておっしゃって、その後、水が吹き出るように次から次へと思い出されて話を語ってくれました。

そのお話を、私たちの会の小野和子さんと庄司幸栄さんがこういう本（『佐々木健の語りによる遠野郷宮守村の昔ばなし』小野和子・庄司幸栄編 世界民話博実行委員会刊行）にまとめました。健さんはほんとうにたくさんお話を思い出してくださいました。今日見ていただく映像はですね、ご存知の方もいらっしゃると思うんですが、佐々木健さんと小野和子さんの昔話を「語る」「聞く」という姿を『うたう人』という映画にしましたが、そのときに撮りました映像をみなさんに観ていただきます。どうぞご覧ください。

## 瓜こ姫こ

語り 佐々木 健さん(岩手県遠野市宮守出身 宮城郡利府町在住 昭和十二年生)

むがしむがし、あるどごろに、おじいさんとおばあさんがありました。おじいさんは山へ柴刈りに、おばあさんは川さ洗<sup>あれ</sup>え物こさいったれば、川上のほうがら、つんぷかんぷ、つんぷかんぷと、大きな大きな瓜こが流れてきたんだんとすや。

ばさまな人、じさま山さ行って喉っこかわいでくるべかなと思ったもんだがら、腰上げ<sup>こしゃ</sup>っこしながらじゃぶじゃぶと川の中さ入っていき、その大きな大きな瓜っこは、取おって持おって帰って、戸棚っこの中さ入れてしまっておいたんだとすや。

したれば、やっぱり、じさまの人、

「ああ、喉っこかわいだじゃ、喉っこかわいだじゃ」

って言いながら帰ってきたもんがら、ばさまの人、

「じさまやじさま、戸棚っこの中さ、いい物入<sup>い</sup>ってるがら、開けでみろ」

って言われたんで、じさま

〈なんだべ、なんだべな〉

とそこと開けで曲がってみだれば、中さ大きな大きな瓜っこが入<sup>い</sup>ってだがら、それば取おって持って出して、せい板(まな板)の上さのせて、熟れたどごろから切るべと思って、包丁ばあてがったれば、熟れたどごがらばかっ<sup>い</sup>と割れで、中がら、おぎやあおぎやあおぎやあって、女のあかちゃんが生まれたんだんとすや。

瓜がら生まれだがら、瓜こ姫こと名前ばつけで、大事<sup>でえじ</sup>に大事<sup>でえじ</sup>に育<sup>おが</sup>したれば、いつのまにか瓜こ姫こ、

カラントン カラントン

トンカラトントン

くうだがねえじゃ ばあばやな

カラントン カラントン

トンカラトントン

くうだがねえじゃ ばあばやな

って、一日に一反も二反も機織りっこのできる、手先の器用な、手えどおのいい童<sup>わらす</sup>こに育ったんだとすや。

瓜こ姫こ、カラントンカラントントンカラトントンと機織りこしてたれば、いつのまにか、十七、八にもなったれば、あだりほどの人たちが、

「瓜こ姫こ、嫁ごにけでやねばねんだ(くれてやらなければいけない)、けでやねばねんだ、けでやねばねんだ」

ってあんまり言うもんだがら、言われても、せっかく年とってがら授かった子どもだもの、



くれえ開けたけどすや。そして、そのこぶしが<sup>へえ</sup>入るとごから、開けたとごから、そっちの方曲がってみだればなす、山母の口が、あんぐ あんぐ あんぐと耳まで裂けできたっけどすや。

「ああ、これはわねえから、帰ってくださいよ」

って言<sup>ゆ</sup>んだけども、こぶしのくれえ開けたもんだが<sup>じょうめえ</sup>ら錠前<sup>じょうめえ</sup>っこすることでできなくなって、突っかえ棒だけになってしまったけどすや。でまた、

「帰ってください、帰ってください」

って、泣きながらしゃべってたっけ、

「で、帰ってくるからよ」

て、まだ戻ったけどすや。

戻ったがらいがったなと思って、また、

カラントン カラントン

トンカラトントン

くうだがねえじゃ ばあばやな

て織ってたれば、そいつ聞いて、帰っていがねえでいだけどすや。そして、こぶしのくれえ開がったとごから、そっとまがって見たら、いつのまにか、こんどこっちの左の口も、あんぐ あんぐど耳まで裂けで、汚ねえ歯っこがぼろっと欠けで落ちだっけどすや。そいつ見でおっかなくなって、

「ぜひとも帰ってくださいよ」

と言ったれば、こんどは、またでて来てなす、

「こんどは、おれの頭<sup>ゆ</sup>っこの入<sup>へえ</sup>るくれえ開けでけねが。面<sup>つら</sup>の入<sup>へえ</sup>るくれえ開けでけねが」  
って言<sup>ゆ</sup>ったどすや。

さあ、おっがなくなつたからなす。だって、犬だって猫だって、面<sup>つら</sup>の入<sup>へえ</sup>るくれえ開ければ、黙<sup>へえ</sup>ってでも入<sup>へえ</sup>ってくるなおなす。そいつ知らながつたの、あんまり甘やかされで育てられたがら知らねがったんだが、面<sup>つら</sup>の入<sup>へえ</sup>るくれえ開けだけどすや。

したらば、なあとそれ、火箸よりも長い爪を大きな戸に引っ掛けて、ガラガラガラッと開けで、中<sup>へ</sup>さ入<sup>へ</sup>ってきて、瓜こ姫こをつかまえて、元結<sup>もとゆ</sup>いこのどごをつかんでぐるぐるぐるどまわして、土間さドダンと踏んづけで投げつけて、そして台所から切れない包丁を持ってきてなす、チャリチャリ チャリチャリ チャリチャリ チャリチャリと皮ば剥いで、その剥いだ皮を頭がら被って、そして着物っこ着てなす、瓜こ姫こに化けたっけどすや。

そして、瓜こ姫この骨<sup>こ</sup>っこのあばら骨だの、なにもぐしゃぐしゃ食ったやつをがらがらと集めで、裏の畑の柿の木のとごのまぶっこ（段々畑の斜面）さ植えでなす、あたかも初めて来たがのようなふりして、待ってらっけどすや。そして、

カラントン カラントン

トンカラトントン

て機織りしてだっけ、そごさ、じさまとばさま帰ってきたけどすや。じさまとばさま帰ってきてかに、門口のとごさつ立って、

「なんだか、うちの瓜こ姫こ、いつもの機織りの音と違うなあ、違うなあ」  
って言って来たけどすや。そして、縁側のそばさ来てかに、

「瓜こ姫こ、瓜こ姫こ。早く起きで、いい物買ってきだがら、見さ来いや  
って言ったら、

「そったらもの見たぐねえ」

つつんだっけどすや。

「なして、そったら荒げだ言葉使うんだ。荒げだ言葉あ使わねんだじえ。嫁ごさいぐ人、そつ  
たなこと使ってわねんだ」

って、おばあさん、さとすけどすや。おじいさん、

「そうだ、そうだ」

って言ったけどなす、いつもと違うからって、

「ゆっくりのんびりしでた方がいんだじえ。かぜっこでもひいだら」

って言って、おばあさんがおさめてくれたんで、

「はいはい、わがった、わがった」

て言ったっけどすや。

そして、じいさんとばあさんと、縁側さ買ってきたものっこ置いてなす、そして働きさいっ  
たけどすや。したら、そごの入り口の<sup>はい</sup>とごさ、<sup>とりごや</sup>鶏小屋っこあってなす、<sup>にわとり</sup>鶏っこが、ケケロコ、  
ケケロコって鳴いてたけどすや。ケケロコ、ケケロコって鳴きながら、

裏のまぶっこ

掘ってみろや

って鳴くんだけどすや。そいづ聞いたどもなす、

「<sup>めんどり</sup>雌鶏っこ、<sup>おんどり</sup>雄鶏っこだって、たまには間違って鳴ぐときはあっけがら」

と思って、知らねふりして、柿の木のあるどごさ行ったらば、カラスが止まってでなす

カア カア

裏の畑っこ 掘ってみろや

まぶっこ 掘ってみろや

って言うもんだつんで、そご掘ってみたらば、なにせそれ、十八、九まで育てた瓜こ姫こがな  
す、殺されてあったもんだがらなす。

「なんとしても、仇とってけねばねえな」

というこどになって、仇とることになったどすや。だけどなにせ、年とったじさまとばさま、  
勝てるわけねから、なじょしたらいかべつったら、台所さ行ってかに、包丁（<sup>まさかり</sup>鉞）ばてろて  
ろになるくれえ研いで、そいつ逆手に持ってなす、そこっと、台所の方から上がってって、

「瓜こ姫こ、瓜こ姫こ。お前いい童<sup>わらす</sup>こに育ったな。いいどごさ嫁っこにいけんだがらな」

って、声っこかけながら、そこっと行って、後ろさ立ってなす、

「瓜こ姫こ、瓜こ姫こ。今日なんぼくれ機っこ織れた。一反ぐれえ織れたのが」

って聞いたっけどすや。したら、瓜こ姫に化けた山母が、

「ほうれ、じさま、今日このくれえ織れたじゃ」  
と言って、ぐうっと後ろ向いだどきに、その<sup>まさかり</sup>鋏でもって、びったりと額<sup>ひて</sup>こびをぶんなぐって、  
仇ばとったんだどやあ。

どんとはれ

\* \* \* \* \* 以上 映像上映 \* \* \* \* \*

記録 山田 裕子(みやぎ民話の会、「民話 声の図書室」プロジェクトチーム)

## 6. 探訪者がとらえた民話のなかの「こどもの誕生」 その二

話題提供 山田 裕子(みやぎ民話の会、「民話 声の図書室」プロジェクトチーム)

### 【女の子の誕生としての『瓜こ姫こ』】

いかがでしたか。先程小野さんが話した『一寸坊主』や『田螺の息子』は、おじいさんとおばあさんが一生懸命神様に願って授けられました。けれども、『瓜こ姫』は、神様に願ってはいないのに授かったというお話です。そして、『一寸坊主』も『田螺の息子』も『桃太郎』も、みんな男の子の誕生のお話だった、女の子の誕生した話はこの『瓜こ姫』だけなんです。これから私はその『瓜こ姫』について話をします。

### 【巫女の家での『瓜こ姫こ』の語り】

その前に、先程の映像についてお話しますと、健さんの家は代々宮守で巫女職<sup>みこ</sup>をしている家で、明治十五年生まれのおばあさんのさとさんも、巫女職をなさっていたんですね。健さんの家は、みなさんが占ってほしいということを拜む巫女職の家だったんです。私たちは健さんの家ですごく古いオシラ様を見せていただいたことがありました。

みなさんは健さんの『瓜こ姫こ』の語りや、普通の昔話を語る調子と違うことにお気づきになったと思いますが、さとさんは祈祷するときに唱えるのと同じリズムで『瓜こ姫こ』を語ったそうです。健さんは、おばあさんから聞くこの話が一番好きな話だっておっしゃっていました。

### 【『瓜こ姫』の誕生のすがた】

それでは、これから『瓜こ姫』について少しお話したいと思います。『瓜こ姫』が願ってもいないのに授けられたと言いましたが、じゃどういう形で授けられたのかというと、みなさんもよくご存知のように、おばあさんが川に洗濯にいったときに川上から瓜が流れてくるんですね。で、その瓜を家に持ってかえって包丁で切ろうとしたらひとりではぱかんと割れて、玉のようなかわいい女のあかちゃんが生まれます。

これは小野さんのお話されたあかちゃんとは違いますよね。小さいというわけでもなくて、田螺でもなくて、人間のとてもかわいいあかちゃんが生まれてきます。それが小野さんの話とは大きく違うところですよ。

## 【瓜をもたらす川上の世界】

そして、私は川から流れてくる瓜から生まれたということを聞いたときに思い出したことがありました。私は四人姉弟の二番目ということもあって、小さい頃やんちゃだったらしくて、母から「川から流れてきたのを拾ってきた」と言われたり、「橋の下から拾ってきたんだよ」とよく言われたりしました。こういうことをみなさんのなかにも言われたことがある人がいるんじゃないでしょうか。だから、私は川から流れてくるということを、懐かしいような身近な感じで聞きました。

川上から流れてくるということはどういうことなのかなあって考えると、川上にはもうひとつの世界があって、それは神様のいるところと考えることができるのかもしれませんが。そのもうひとつの世界から瓜が流れてきて、子どものいないおじいさんとおばあさんに授けられます。そして、玉のようなあかちゃんが生まれます。名前を「瓜こ姫」と名づけていますよね。「姫」と名前をつけたことから考えても、なんか尊いものだというふうに感じられます。おじいさんとおばあさんも「瓜こ姫」と名づけて大事に大事に育てます。

## 【『瓜こ姫』『桃太郎』の瓜と桃】

『瓜こ姫』と似ている話で思い出すのは、川からつんぷくかんぷく桃が流れてきたのでひろってきて、家に持って帰って切ろうとしたら、桃がぱかっつと割れて玉のような男の子が生まれます。こちらは桃から生まれたので、『桃太郎』と名づけられます。川上から流れてくるのがなんで瓜と桃なんだろうと思いますけれども、瓜はむかしからある果実でした。

ずいぶん前に石巻<sup>おおうり</sup>の大瓜というところに行ったことがありました。そこで聞いた昔話に瓜が出てきたんです。どういう話かという、むかし、おじいさんとおばあさんがあって、海から貝をとったり魚をとったりして、崖のところにある洞穴で暮らしていたというんです。その洞穴の入り口に、ツバクラが毎年巣をつくって子どもを産むので、おじいさんとおばあさんは、「ツバクラ、ツバクラ、お前こうやって毎年おれの洞穴を借りているんだから、なにか持ってこいや」って言ったら、次の年に持ってきたそうです。ツバメが口にくわえてきて、ぼとんとひと粒の種をおじいさんとおばあさんの前に落としたりしてというんですね。

おじいさんとおばあさんは、ツバクラが落としていったものを、これは大事にしろっていうことだなあと思って、植えて育てたら見る間にぐんぐんぐんぐん大きくなって、とても大きな実がなった、これはうまそうだと思ってとろうとしたが、大きくてふたりだけではとつてもとれない。それで舟で海を渡って、助けてくれる人をさがした。そしたら、向こう岸に小さな集落があって、その人たちに来てもらって、その大きな実をとるのを手伝ってもらってみんなで食べたという話があるんです。その大きな果実は瓜だってことをいう人がいて、そしてそこは大きな瓜があったから「大瓜」っていう地名をつけたっていう話を聞いたことがありました。

この話からわかるのは、瓜は、貝とか魚を海からとって洞穴で暮らしていたときからあった果実ということなんです。瓜は、すごい古いむかしからある実なんだということがわかります。そして、瓜と桃は神様に供えるものだったということも聞きました。ですから、川上から流れてきて、そして瓜から生まれた「瓜こ姫」の話はとても古くて深い意味のあることではないでしょうか。それがどういう意味があるのかをこれからみなさんに意見をいただいて一緒に考えてみたいと思います。

## 【家の内と外 瓜こ姫と山母】

それから、女の子が誕生する話は『瓜こ姫』だけと話しましたが、みなさんはこの話を聞いたときに、どこが一番心に残りましたか。瓜こ姫は大事に大事に育てられて機織りの上手な娘になります。あるとき、おじいさんとおばあさんが町に出かけるときに「ぜったいに戸を開けてはいけない」と言われたのに、瓜こ姫は、山母の言うままに少しずつ戸を開けていきます。そこが私は心に残ります。山母が来て、「戸を開けてくれ」と言って、最初は指が入るくらい、次にこぶし、次は面<sup>つら</sup>が入るくらいって、山母はとても巧妙ですよ、瓜こ姫は少しずつ開けていって、最後には山母に食われてしまう。

それまで瓜こ姫は外に出た気配が全然ないんです。家のなかで機織りだけを一生懸命にやって、そして大きくなりましたよね。山母が来て「戸を開けてくれ」って言われると、言われるままに少しずつ開けていきます。私は、なぜ瓜こ姫は戸を開けてしまうのかなあと最初は思ったんですが、何回も健さんの話を聞いているうちに、瓜こ姫はもしかしたら外の世界に興味をもっていて、外の世界の人に触れてみたい、出てみたいという気持ちがあったのかもしれない、だから少しずつ戸を開けてみたのではないかと思うようになりました。

山母は瓜こ姫の皮を剥いで着た後、山に帰らずに瓜こ姫になりすまして機を織っています。すぐに逃げずにそこにいるということも不思議なことだなあと思います。このように瓜こ姫については謎がたくさんあります。私たちの先祖は、女の子を主人公にした「瓜こ姫」を、長い間大事に語ってきたと思うんですね。川上から流れてきた桃太郎は、戦争とかその時代の状況によって桃太郎像を大きく変えられてきましたが、それに比べて「瓜こ姫」は、ほとんど形を変えずに語られてきました。みなさんからもこの謎の多い瓜こ姫についてどう思われるか、お考えを聞かせていただけたらと思います。

記録 山田 裕子(みやぎ民話の会、「民話 声の図書室」プロジェクトチーム)

## 7. みなさんと感想や意見の交換 その二

司会進行 小田嶋 利江 (みやぎ民話の会 「民話声の図書室」プロジェクトチーム)

小田嶋—ありがとうございました。『桃太郎』と『瓜こ姫』って、考えればとっても対照的な話なんですね。桃太郎はなんの迷いもなく外に出ていき成功して帰ってくるのに、瓜こ姫は親に言われて自分の意志は見えずに家に入れられている。彼女は手仕事をなりわいにして一人で生きていけるようなんだけれども、あるときから家を出てお嫁に行くように言われる。なんだか不思議で、家制度との関係ももしかしてあるのかなあと、そんな気がします。前半では、神様に願って子どもを授かったお話で、「めでたしめでたし」で子どもが成功して嫁さんを連れて帰ってくるお話もあるし、そんなうまく育たなくて、というか周りの世間さまのためにいろいろしがらみがあって、親殺し子殺しになってしまうような、そんなとても身につまされるような、昔話ってこんなに身につまされるようなことがあっていいんだろうかと思うようなお話もある。で、後半は今度は神様には願わないんだけれども、なんていうんでしょう、天から授かったというのか、川上の方から授けられた聖なる力をもった瓜とか桃から生まれてくる男の子のお話と女の子のお話、『桃太郎』と『瓜こ姫』について見てきました。いろいろな条件でいくつもの子どもたちの話をみてきて、頭を整理するのなかなかたいへんかと思うんですが、ここで、またみなさんのご意見を聞いてみたいと思います。話題提供のお二方から補足の話がもしなにかあれば、まずお話しただければ…

小野—私がとり上げた方の話は、子どもを願った夫婦に授けられる子どもの話でした。そして、それは全部男の子だったということも言いましたね。ですから、これは私の考えですが、川上から桃が流れてくる、川上から瓜が流れてくる、そこにはからずも子どもが潜んでいたというこちらの話は、実はひじょうに古いのではないかという気がします。むしろ、子を願っていた方の話は全員が男の子だって言いましたけども、家制度で男の子がどうしても必要になってきている時代を反映するかのよう、そこで生まれた者たちは男になっていくというところがあるんですけども、それと対照的に『瓜こ姫』の話は女の子でたった一話なんですけれども、これはひじょうに古い気がいたします。そして、機を織っているという姿は、神話にあります天照大御神がやはり機を織っておられましたね。そして、そこへ素戔嗚すさのおが暴れ込んできて天岩戸に隠れてしまったり、そうするとその岩戸を少しずつ開けさせて最後にはそこから出ていらっしゃるというような話の筋立てからいうと、『瓜こ姫』の話はひじょうにそういう神話に近い古い話ではないかと思えます。『桃太郎』の方は先程山田さんが言われたように、日本の国が国土を広げて外国へ力を伸ばしていくときの英雄みたいにして、私のような昭和一桁世代は、『桃太郎』というのは日本の国の英雄だったんですね。ですからいつも「日本一」って旗を持って日本から外へ攻めていって、外を征服して帰ってくる英雄のようなイメージでありましたけれども、もっとそういうふう汚れていない「むかしむかし」は、桃っていう神秘的な果物が流れてきて、そこに託された男の子という意味で、ちょっと私がお話した子どもたちとはひと色違う、神に近いような存在としての子どもって感じがいたします。そして、もうひとつ気になるのは、私が話した話や『桃太郎』はみんな外に行くことによって成功していきますけど、『瓜こ姫』は戸を開けて外へ出ることによって破滅するんですよね。内に籠もっていれば安全だったんですけども、少しずつ戸を開けさせられて外へ出たことによって自らを滅ぼしていくというこの形ってというのは、たくさん謎を含むものではないかと思えます。どんな謎かということは、それぞれがまたお考えを聞かせていただければありがたいと思います。

小田嶋—はい、ありがとうございます。ほんとうに様々な側面のある、どう考えていいのかよくわからないような面もあるお話でしたけれども、どこからとつかかってもいいんですが、もしなにか感じたことがありましたら、ああ、はい。

参加者F(女性)—桃太郎やその男の子たちは、望まれて欲しくて手に入った子どもって言いましたよね。女の子はそうじゃない、頼まないのに欲しいと思わないのに授かったって言うけど、ちょっとそれ言い過ぎじゃないかなあとってね。望まなかったっていうのはこっちが想像するだけで、川から流れてきてもこの子は欲しくなかったのにきた子じゃなくて、あっ、うれしいと思ったんですよ。さっき、健さんが瓜こ姫を育てたのにあまり躰をしなかったと言いましたけれども、教えなかったから、家の中にいたから、こぶしくらい頭くらい開ければ、犬でも猫でも入ってくるのを誰でもわかるんだから、教えることをしなかったから、甘やかしてしまったからだめだったって、そこで子どもをちゃんと躰なきやだめだったのにつて、健さんの気持ちがね、出たような気がしました。ただ、やっぱり私が気になったのは望まれてきた子どもと望まれずにきた子どもって分けるのがね、ちょっと引っ掛かったんです。そうじゃないんじゃないかなということ。以上です。

小田嶋—はい、ありがとうございます。確かにそういう言い方は確かに…そうですね、『おんぶお化け』を読んでいただきましたけれども、鬼の子でも蛇の子でも、やっぱり迎える方の親が子として迎えたときにそれは子どもになるんだなあっていうのが、そういうこともあそこから感じられるんじゃないのかなあとということ、確かに思います。はい。あとなにかありますか。

参加者D(男性)—何回もすいません。わたしの妹のようで安心してしゃべっています。先生、ごめんない。またしゃべらせていただきます。

小野—どうぞ、しゃべってください。

参加者D—瓜っていうと、私一番先に思い出したのが真桑瓜まくわうりなんです。みなさん、真桑瓜ってわかるね、昭和生まれの人。真桑瓜っていうのあったんだよね。西瓜みたいに横にこう縞の入った瓜、その大きいやつじゃないかな、流れてきたのは。そして、上かみの方から流れてきたから神様っていう言葉を使ったんですけども、普通だったら、「娘とか女の子が生まれたんだどしゃ」って言うんだけど、「お姫様が生まれたんだどしゃ」っていうのは、一般の子よりもレベルがお姫様って言うことによつて、娘や女の子よりもちょっと位が高い、品のいい子だつていう印象を受けるわけですね。そして、今おっしゃつたとおり家から全然出さんないために、ほんとうに神聖な純粋な気持ちでもう機を織ることだけで育ってしまったから、怖さも知らないし、ある意味ではお人好しつていうか、人を見抜く性格というか、見抜くことができなかつた、それがひとつの悲しい物語じゃないかなと思うんですね。機織りつていうのは不思議だなと思うのは、七夕の彦星と織姫も、片方は牛飼いですか、片方は織姫で、機を織る、それから夕鶴のなかに出てくるゆうつていうんですか

小野—つう

**参加者D**—つうね。つうもね、機を織る。なんか品があるっていうか、機を織るっていうと、ひとつレベルが上じゃないかなとそんな感じがしました。結局は、純粹なために世間を知らないために真っ白なほんとに姫っていうのにふさわしい娘だったんじゃないかなって、そのためにそうってしまったんだなって感じがしました、以上です。

**小田嶋**—ありがとうございました。

**山田**—おっしゃるとおり、私も同感だなと思ってお話を聞きました。それから、さきほど「願わないのに授けられた」っていうのは言い過ぎじゃないかってお話があったんですけど、「願わないのに」という言葉はちょっと強い言葉だったかなと思うんですが、子どもって自分が産もうと思って産むと私は思っていました。けれども、「瓜こ姫」のお話を聞いていると、川上のもうひとつの世界から、先程は神様という言葉も使いましたけど、もうひとつの世界から授けられるものだよっていうことを私たちの先祖は言っているんじゃないかなあと思うんです。だから、私の小さいときに「川から流れてきた」って言われて、ちょっと私は悲しい気持ちにはなったんですけど、でもよく考えてみると自分たちの力の及ばない、川上の尊い世界からもたらされる子どもだよっていうふうに言っていると、佐々木健さんも、おばあさんに小さいときに水車小屋に連れていかれて、そして「お前は、水車小屋の流れているところの堰のところの箱みたいなのに入って、

**小野**—<sup>たらい</sup>鹽

**山田**—「鹽のところにお前はいたんだよ」って、よく言われたそうです。で、健さんは、「ああそうなんだなあ」って本気にしていたっていうんですね。昔話を家の母が知っているわけでもなかったと思うんですけども、でもそういうことを話しているってことは、物語は知らなくてもどこか子どもっていうのは、別な尊い世界から授けられたっていうふうを考えてきたんじゃないのかなあって思います。

**小田嶋**—ありがとうございます。あ、はい、また手が挙がりましたね。

**参加者G(女性)**—ちょっと検討違いのことかもしれない、そういうふう聞こえるかもしれないんですが、今日たくさん聞かせてくださった話が、今あらためて聞くととても生々しくて、それがなんでかという最近の子どもをめぐる事件のようなものとしてあげられていることともものすごく繋がっているような感じがして、すごく苦しくなるような感じもしたからなんです。だから、実話のどうにもならない、解決の糸口すらないような現実のように聞こえてくるんですが、東北という場所が今は少し違うかもしれませんが、ものすごく飢饉に襲われる土地で、約四年に一度はその飢饉と呼ばれる年だったと。だとしたら産まれてきた子どもというのは、ひじょうに生きていくのがたいへんだったというのが基本というか、それが現実。うまく育つということがむしろ希有のような現実のなかで、神から授かるべき子というのは、まるまると太ったあかちゃんではあってはならないというふうに思って、つまりそこには神なんかいるわけないって思わずにはいられないほどの現実のなかで、そういう現実があったのだとしたら、その神から授かったのは、川上の存在のようなもので想像力を発動させる物語の根のようなものだとしたら、そういう意味で異形というものが与え

られることになったのではないかと。だから、神というものをつくり出した人間の想像力を考えると、神というものが物事の始まりの根のようなものだとしたら、つまりは人間であるからこそすごくたいへんなことになっていると、で、その証拠として子を授かった父とか母というのは、その時代に振り回されて翻弄されて、愛情をかけて育てていたとしても、ときに殺して殺されるとそういうことがあるのかなあというふうに、物語のなかで。だから、先程小野さんがおっしゃった「みな異形なのだ」という問いがあったと、それは問いではなくてなんというか願いのように聞こえてくるというか、みな世間様とか村の共同体のとても生きづらい苦しさの、厳しさのなかで、みな同じでなくては生きていけない、<sup>ゆい</sup>結から外されてしまうというようななかで、「みな異形なのだ」ということがなんか願いのように聞こえて、今の苦しさとすごく繋がっているような気がしました。で、『瓜こ姫』の外に出ることで破滅するというのを聞いてけっこう震えたんですが、すごく飛躍あるような言い方で違うかもしれないんですが、なんかどこかで「神は現実にはいないよ」というような、それを外に出したら絶対いけないんだっていう、なんかそんなふうにも思えてきて、ますます現実の厳しさというのをいかに当時の人が考えていたかということを考えてしまうんですけども。

小田嶋—ありがとうございます。とてもいいご意見をいただきました。

参加者C(女性)—佐々木健先生の「瓜こ姫こ」を語ったりするときに、子どもに対してね、「望んでもできないものでもあるし、授かったときの感謝というのもあって、だから子どもをあやすときにな、聞いたことあるべ、『おんこう、おんこう』ってあやすべっ」て。「あれはな、<sup>おんこ</sup>『御子』だからな。神様から授かった<sup>おんこ</sup>『御子』だから、『おんこう、おんこう』ってあやしてんだぞお」っていう言葉を思い出しました。

小田嶋—ありがとうございます。あ、じゃあ、先にお願ひします、一番端の方。

参加者H(男性)—今日はどうもありがとうございました。えーとですね、私も民話の会の当事者なんですけれどもなかなか普段参加できず、民話の会のビッグイベントだけは私も行きたいなと思って来ました。実はこの資料集のなかに、『瓜こ姫』ということで、私の祖母の話が載っております、千葉きみというですね、私は、子どものときから夜寝るときおばあちゃんと一緒に寝ましてですね、必ずむかし語りを語ってくれました。それがないと眠れないというですね、そんなことで私が大好きだったのは、『三枚のお札』だったんですけど、「ああ、この『瓜こ姫』もずいぶん聞いたような気がしたなあ」となんか思い出しました。で、「佐々木健さんの『瓜こ姫』と私の祖母の『瓜こ姫』は、かなり色が違うな」と思いました。で、私の祖母の場合アマノジャクが出てきまして、ユーモラスな、なんとも間抜けなやつだなあという笑い話になっているんです。まずひとつは、今日聞いたなかで、「民話というのは暗闇のなかから生まれたんだな」ということですね。暗闇というのは、空間的な暗闇と、あと私達の心の闇で。私達は苦しい現実世界のなかで生きていますけども、その苦しみのなかにちょっとした灯りがほしい、その灯りというのが民話なんだろうなあ。そしてその民話の灯りのなかにも、光もあれば当然影もできる、で、子どもが授かるということは喜びでもあるし、同時にまた大きな痛みも生じる。その苦しみに相対して、「あなたはどうやって生きていくんだ」っていうですね、それはひとつの先祖からの問いかけではないかなと、願っても願わなくても、そういうものは必ず訪れるんだ、「さあ、あなたはこれをどう乗り越えていくんだ」っていうことで

すね。それぞれ問いかけをもらって、私たちがひとりひとり人生を歩いていく、一生を終わっていくということが昔話なのかな、民話なのかなと、そういうふうに思いました。民話の種というのは、その種を受け取った人が、その種をどうやって咲かすかによって全く変わってくる。で、それがあからこそ、民話というのはすごくおもしろいんだろうなあというふうに思います。その民話の種というのはおそらく蓮の花のようなもので、泥のなかからふわぁっと真っ直ぐに咲いて白い可憐な花を咲かせる、そういうものなんじゃないかなあというふうに、あらためて今日感じました。ありがとうございました。

**小田嶋**—ありがとうございました。

**小野**—ほんとうにこの「子どもの誕生」ということをテーマにして、誕生する子どもたちの話を民話のなかで眺め直してみたときに、やはり私は非常に大きな驚きを感じました。それは先程もちよっと話しましたが、子を願う者たちに、神、氏神さまのような者は異形のものとして子を授けているという形がどの話にもあるんですね。そうするとその話と、それから桃が流れてきて桃からあかちゃんが生まれた、瓜が流れてきて瓜からあかん坊が生まれたって話は、明らかに区別されるべきではないかというのが私の考えなんです。そして、川の向こうから流れてきた命をひろって育てた「桃太郎」と「瓜こ姫」の話は、むしろ神話に近い話なんじゃないかと思う。それに比べて子を願った人たちに与えられたさまざまな苦難を伴うような子育ての実態っていうものは、家を継ぐべき男の子を求めざるを得なかった時代の変化のなかで、生まれてきているひとつの姿かなあという気もいたします。そして、そうやって生まれてきた子どもを、このごろの問題とだぶりながら考えるんですけれども、殺したり、そして殺す理由が世間様の迷惑になるからと言って殺すんですよ、民話のなかでもね。それはつい先ごろ起こった事件と全く同じような理由を感じられるんです。そうしますと、子を求めて子を授かった民話のひとつの群れから私たちが汲み取るべきものは、まだまだたくさんあるんじゃないかと思う、これと言ひ難いようなものをたくさん秘めながら先祖は無惨に殺したり、それから生かしたりしながらも存在するというのを物語にしてきたんじゃないかなあという気がするんですね。こうということに限らず私たちが人として私どもが存在しているときに、私どものなかにもある田螺の要素、蛇の要素、それから蝮の要素といったらいいでしょうか、そのような要素をどう自分のなかで認識して生きていくのかっていうことを私は問われているような気がしてこの問題を考えてまいりました。答えはなにかうまく出せないんですけれども、これを考え考え考え続けていくことが、もしかしたら答えかもしれないというふうに思います。

**小田嶋**—ありがとうございました。ぜひ言っておきたい方いらっしゃいましたら、はい、そちらの方。

**参加者I(女性)**—質問なんですけども、先ほど大瓜の地名の由来ということでお話があった、あのお話の出典というか、どこに行ったら詳しい話が聞けるかをお伺いしたいんですけれども。

**山田**—偕成社から出ました『宮城県の民話』（日本児童文学者協会編 偕成社 1982）っていうのに書いてあります。子どもたちが読む本で、私たちが聞いた話を子ども向けにもう1回再話したものが載っていますので、それを読んでいただくとわかります。

参加者I—近くに蛇田（石巻市蛇田）というところがあって、その話とも似ていると思うんですけど、それとは完全に違う話ということでよろしいのでしょうか。

山田—はい、違います。助けてくれる人をさがし求めて一生懸命に歩いたけれどもいなかったので、石巻の稲井という地名になったと、蛇田とは違います。

参加者I—蛇田にも似たような、ツバメが持ってきた種をまいたらそのなかから蛇が出てくるんですけど、そういうのと似たような話で途中から違ってくるみたいなそういう印象を得たので、大瓜の話がどういう視点から出たのか気になったので聞いてみました。さがしてみます。ありがとうございます。

小田嶋—はい、どなたか。あ、そちらの方。

参加者J(男性)—すみません。仙台で子育てしている者ですが、今日の話をしていろいろ聞いていて、望んだ子どもと望まれない、望んでいないのにできた子どもという考え方もできるんですけども、子育てをしていて日々娘に、望んでしまうことと、「これはしないでね」っていうふうに否定してしまうことと、両方あって、すごく大きな期待と、いつも取り返しのきかない失敗が子育てには常に両方あるなかで、ぼくら育てる親も未熟ななかやっているなかで、すごく不安な判断を毎回迫られているっていう、ぼくら子育てのなかで日々感じることなんです。そういったときにこういう話が語られている世界というか、語られている時間みたいなものを、ぼくはすごく持たずに育てちゃって、もしかしてそういう語られた問題というのは全然変わっていないんですけど、ぼくらが今その話を全然知らずに育てその話が全くない状況のなかで育てている時代と、むかしは子育てのなかで、両方とも不完全だったりとか、子どもとの関係のなかで、両方を語ってくれてるような物語があるっていうそういう世界っていうのは、ぼくはとてもうらやましく感じてしまって。で、話を語っている時間というのが、もしかしたら子どもに語っているというのもあるんですけど、語っている親本人がとっても救われた話なんじゃないかなっていうふうに、ぼくは。その『瓜こ姫こ』にしても、その前の『田螺の息子』にしても、自分が不完全であってもいいんだ、子どもが自分の望んだとおりに育たなくてもそれはそういうことなんだというような、なんかちょっと大きい物語の世界で住んでいけるような世界が、もう少しむかしにはあったような気がして、それをぼくらは今はちょっと失ってしまっているような気がして、今お話を聞きながら実際にそういう物語のなかで語っていくことがもしかしたらできるかもしれないし、それは今ぼくらにとってなんかすごく欲しいものだったな、いただいたものだったなという気持ちで今日聞いていました。ありがとうございました。

小田嶋—ありがとうございました。あ、はい。

参加者K(男性)—すごくわかります。で、私もみやぎ民話の会に入って、小野さんの再話した本を必死になって暗記して、それを子どもたちに伝えているんですね。そうすると、必死で暗誦しているうちにだんだんだんだん安心してくるんですよ、私自身が。声に出して何回も何回も暗誦しているうちに、なんだかわかんねえけども、とにかく、ああ、なんかね、いいですよ。それがよくわかんない、おれも。ただ、そういうものが、たぶん何百年か何千年かわかんないけども、ずっと続いてき

たのはうんと大きなもんじゃないかなと思うんです。だから、小野さんが今度『あいたくて ききたくて 旅にでる』という本を出されましたけども、ぜひね、手にとって、声を出してね、とにかく声に出して…。そしてね、思ったのは、方言がね、やっぱりすごいんですよ、方言が。やっぱりものすごい深いものがあって、そしてそこに物語が出てくると、もうこれはたまらないです。どうしようもない。だから、子どものためなんてよりも、おれのためなんです、ええ。ほんとにそれがね、私、ほんとうに伝えたいんです、みんなに伝えたいんです。今うんとこまっている人は、ぜひね、小野さんの本を声に出して何回も暗誦するほどね、(笑いと拍手) 何回も、どうしようもないくらいになります。終わります、はい。

小田嶋—ありがとうございます。

小野—すみません、本の宣伝をしていただいてありがとうございました。私自身今日のテーマについてすごく考えたことは、その子を、ということではなくて、「お前は何者なんだ」ということを、このテーマは突きつけているんだと思うんです。子どもをどう育てていくかということとはちょっと違って、「ここに存在しているお前、かつて生まれた子どもであったお前、お前は何者なんだ」ってことの問いかけが、この一連の話のなかにあったような気がしているわけなんです。そこをきっかけとして、私はさっき永浦誠喜さんの言葉を言いました。「どんな人でもたりないものがあって、たりるものがあって、それが人つつうもんじゃねえのが」って。「片子とか、それから障害とか、みんなそういうものをもちながら、それぞれ存在しているんじゃないか」ということをこの話は言っているんだぞって、先程語ってくださったことがまた思い出されて、それをみなさんと民話をとおしながら共有したいなという気持ちになっております。

小田嶋—ありがとうございます。ぜひ言っておきたい方、いらっしゃいますか、はい。

参加者L(男性)—また巻き戻すようですよ。すごく言いづらいんですけども、『桃太郎』と『瓜こ姫』、とくに『瓜こ姫』とかは、そもそも人じゃないような…勝手に育ってりっぱに育つみたいな、神様のように受け取られるんですけど、それが人の形をしていて、も人らしい育て方をされていて、欠けているところが全く人とは違う状態であって、そのふたつを繋げて考えたときに、どっちも人が抱えている、人のなかに自分で神様を抱えていた先祖の姿と、すごく人間らしい欠けた状態の人間の姿、どちらも存在しているように思えて。こうあるべきだみたいなことではなく、今小野さんがおっしゃられた「お前は何者だ」という、それが否定も肯定もされていない状態で提示されているのがすごくありがたくて。で、また本の宣伝みたくなっちゃうんですけども、本の冒頭で、これを携えて旅に出たいというのが編集のチナツさんの言葉にも書かれていて、なにかそれぞれ自分の道を歩いていくというのはすごい自由なことなんだと思いました。すごい自由が肯定されているような気がしてうれしくなりました。

小田嶋—ありがとうございました。もしいらっしゃらないようなら、そろそろ、あっ、もうひとりいました、はい。

参加者F(女性)—昔話を聞きましたけれども、健さんがいつもなにかお話すると、たとえば『桃太郎』の

話をするとすれば、「これがほんとうの『桃太郎』なんだよ」って。自分が語るのがほんとうの話で、ほかの人が話すのはほんとうじゃない、それは健さんがおばあさんから聞いた昔話が自分にとってほんとうの話なんです。いろんな人が、たとえば今日もいろんなお話聞きながら「私の知っている話と少し違うな」ってみんな思うんですよ。そして、それは表では言わないけど、陰に行ってから「私のはそうでないんだ」とか、必ずね、自分の語ってるのが一番好きなもんだから言うんですけどね、それが当たり前だってことをわかっていただかないと、すぐ「私の話じゃない」とかね、「あれはちょっとおかしい」とか思う人がたくさんいるんですけども、健さん流に、「自分の話が一番ほんとの話だよ」と思っていていいから、ただ、いろんな昔話のなかにもいろんなタイプがあって、語り手によって違います、地方によっても違いますしね、それをわきまえておいていただきたいなと思ってお願いいたします。

小田嶋—ありがとうございました。あ、はい。

参加者M(女性)—すみません、本の売り場から失礼します。私も後ろで聞かせていただいていたら、いろんな考えをめぐらせることができましてありがたいなと思っています。私は『瓜こ姫』の話の聞いたときにすごく不思議だったのが、瓜こ姫はずっと存在感がうすくって、外部から機織りが上手だとかいろいろ語られるんですけど、本人の姿がなかなか見えてこないなというのをずっと思っていたときに、山姥とか天の邪鬼があらわれて、その交渉を戸口でしてるときに、瓜こ姫の好奇心とかちょっと外に少しずつでも開けてみてちょっと外の世界に出てみたいと、なにか瓜こ姫の欲望とか瓜こ姫の姿がそこで初めて見えてくるような気がして、今日は「子どもの誕生をめぐって」ということだったんですけども、もしかしたら子どもが誕生するというのは、ただ生まれた姿、そのときに誕生というだけではなくて、なにか本人の欲望の芽生えとか、ひとりの人間としてなにかを欲してしまうっていう気持ちのあらわれも、その誕生のひとつなんじゃないかなというふうに感じました。先程、川の向こうが神の国で、そこから子どもを授かるっていうことは、そこに実際に神様がいるかどうかは別として、なにか物語の想像力の源がそこにあったんじゃないかっていうことを会場から意見を出してくださった方がいて、そういうのも聞きながら聞いていると、民話っていうのは、なんか人がもってしまう欲望とか想像力みたいなものを物語として語っているんだけど、それはけっして物語として閉じたものではなくて、やっぱり暮らしのなかで実際に語られ続けるということは祈りとか願いに近いようなものだったんじゃないかなと感じました。そういう意味では、過去でも現在でもすごく繋がる子どもをめぐると過酷な状況というのは、実際ほんとに今でもあるって話があったんですけども、なんかそこはずうっとずうっとずうっと変わらずにある人間の欲望とか想像力みたいなことと、つき合い続けるためのひとつの鏡のようなこととして民話があるんじゃないかなというのは、ちょっと感じて、感想を、すいません、ありがとうございました。

小田嶋—ありがとうございました。いい感想ありがとうございました。ああ、はいはい、もうひとりいらっしやいました。

参加者N(女性)—もうずいぶん長くなってしまっているのにすみません。

小田嶋—いえいえ、どうぞ。

参加者N—えーと、去年が民話のなかに出てくるおじいさんとおばあさんの話で、今年が子どもの話になって、「次にもし私が勝手に考えたいのがなにかなあ」と思いながら聞いていたんですけども、やっぱり『瓜こ姫こ』が唯一の女性の「女の子の誕生の話」だと聞いて、しかも唯一の話のなかで、女の子は外に出ることもなく殺されてしまう、とても弱い存在として話されてきたと思うんですけども、一方で民話を家のなかで語っている語り手さんというのは、ほとんどが女性だと思うんですね。おばあさんやおかあさんから聞いたという方がほとんどで、語り手として女性が「男の子の誕生」の話をしてきたということに想いを馳せておりました。心のなかで自分が「お前は誰なんだろう、誰なんだろう」という話が先程ありましたが、女性がそういう話を語り継いできたのかなということを考えるきっかけになって、すごくおもしろかったです。すみません、感想になってしまいました。

小田嶋—ありがとうございます。

山田—どうもありがとうございます。すごいもうたどたどしいお話でとても恥ずかしいんですが、でも今おっしゃったことで、答えにはなっていないんですが、女の子が誕生したのが『瓜こ姫』だけだと。そしてようやく成長して美しく機織りもうまく育ったのに、家のなかにとどまっていればなにもなかったのに、それが出ようとしたときに、外の世界に自分で行こうとしたときに、山母だったり天の邪鬼が来て殺されてしまったりひどいめにあう、たったひとつだけ伝えられている「女の子の誕生」のお話が、外の世界に向かったときにそういうことに遭うというのはどういうことなんだろうなあって、すごく考えさせられますよね。これはなにの答えにもなっていないんですけど、ここはほんとうに考えていきたいなというところです。どうもありがとうございます。

小田嶋—じゃあそろそろ、打ち切らせていただいてよろしいでしょうか。とってもいろんなご意見を出していただいて、あまりにたくさんの意見を出していただいたので、そのひとつひとつに丁寧に答えることができませんので、ほんとうに申し訳ないと思っております。今日はですね、いままでみなさんが言われたように、お話の源ともいべき神話の世界から、神様なんていないというような生き難い現実の世界をそのままあらわしているものまで、そうした両者が、たとえば『瓜こ姫こ』のお話のなかにも、同じお話のなかにもそういう両極端なものがモザイクというのでもなく、層をなしてというのでもなく、みんな含まれているということをすごく感じました。やっぱりわれわれはほんとうに想像力の彼方の物語の世界もどうしても必要だし、でもその物語にはどうしようもない現実もそこにどこか残しておきたい、ほんとうのつくり話とか物語にしたくない部分もある、その両方なんじゃないかなとふと思いました。で、私は、たとえば「鬼なのか、人なのか」と問われときに、「お前は何者なのか」と問われたときに、「うーん、私は片子なのかな」という答えを選ぼうと、いまの結論として、「お前は何者なのか」という問いにそう答えることができるかなと思います。だからみんな片子だから、鬼とか人とかそうした区分けそのものが表面的なつくり事で、そっちの方こそがフィクションなのだというふうに思わせることができるのが、民話の力なのかなと思いました。なんかまとめにはなっておりませんが、以上で今回の「民話 ゆうわ座」を終わらせていただきたいと思います。みなさん、ほんとうに時間が過ぎて長い間ありがとうございました。(拍手)

小田嶋—あつ、ごめんなさい。最後の締めはですね、これまで健さんの「とうひ とうひ」（「とんび とんび」）の唄で締めるのが恒例になっておりますので、今日は柴田さんに音頭をとっていただけませんか。今日は健さん、来ていらっしゃらないので…

柴田—はい、恩師、健さんが来られてないので。実は「みやぎ民話の学校」というのがありました。たぶん鳴子だったと思うんですけど、二日酔いで、朝風呂にふたりで入ったんですね。そうしたら健さんが教えてくれたのが『とんび とんび』という唄だったんです。私、風呂のなかで歌うと、「お前、違うな」「違うな」「違うな」と何回も言われたんですけども、どうしてもこれが好きで好きでしようがなかった。震災のあった志津川で、放射能があって、ほんとうに行き場のないような、息が詰まるようなあのときにですね、私はっと思ったのは、この唄でなんかそれを突き抜けていけるんじゃないかという想いがあったんですね。そのときに、志津川であった八年前の「みやぎ民話の学校」で歌わせてもらいました。今、中学校にずっとお手伝いしているんですが、中学校で全校集会があったんですね。で、一番最初にこれをやったんですよ。それから民話を語ったんです。そして、中学生たちがですね、今もなんですよ、私を廊下で見ると、「とんび、とんび」って、おれのことをね、「とんび、とんび」と言うんですよ。で、「歌え、歌え」っていうふうに誘ってくるんですね。おれ、「止めてくれ。廊下でそんな大きい声出すのまずいぞ」って言って、「お前らに昔話教えるから中に入んねが」って誘っています。その『とんび、とんび』というのを歌います。

## とんび とんび

とんび とんび とんび  
まあれ まれ まれえ  
とんび とんび とんび  
まあれ まれ まれえ  
男だったら 刀こ やっから  
まあれ まれ まれえ  
おなご女かんざしだったら 簪 こやっから  
まあれ まれ まあれえ  
とんび とんび とんび  
まあれ まれ まれえ

小野—あら、男だったら禪こじゃないの。

柴田—禪こもあるし鏡もあるんだね。みんなでやるすか、立って。声出すといいよ。それでいきますか。

小野—腰巻きこもあるし。みんなでうたおう。

柴田—じゃ禪と腰巻きでいこう

とんび とんび

とんび とんび とんび

まあれ まれ まあれえ

とんび とんび とんび

まあれ まれ まあれえ

男だったら 禪こ やっから

まあれ まれ まあれえ

女(おなご)だったら 腰巻きこやっから

まあれ まれ まあれえ

とんび とんび とんび

まあれ まれ まあれえ

(拍手)

小田嶋—ありがとうございました。みなさん、長い間どうもありがとうございました。

渡邊(メディアテーク)—はい、長時間、みなさんお疲れ様でした。…

記録 山田 裕子(みやぎ民話の会、「民話 声の図書室」プロジェクトチーム)

—以上—